木道

第拾六卷
第壹號

五月號

『歎異鈔』の枝折（同鈔拜讀に際し氣をつくべき要所）
攝取不捨の意義
超人生と即人生
思想問題解決の焦點

大正九年五月　求道　第拾六卷第壹號

目次

『歎異鈔』の枝折……（一）

攝取不捨の意義……近角　常觀……（二）

一　攝取不捨
二　攝取不捨の概念
三　淨土大師の至誠心釋
四　求道者の意中
五　我々の至誠心
六　岩本氏等の例
七　自力と他力
八　他力の罪惡觀
九　我々の心底に隱れて居る或る思想
一〇　私の眞實に氣のついた順序
一一　攝取不捨の意義
一二　人生が超絶するの力
一三　綱つけられたる猿

超人生と卽人生……近角　常觀……（三）

一　超人生
二　隱れたる思想の法則
三　超生の本願の原則
四　直に來れ
五　『惡しくてもよい』では實人生は動かぬ
六　言うて欲しい一言
七　機の深信は信仰的自覺なり
八　卽人生

思想問題解決の焦點……（四四）

講話

求道會館（本郷區森川町一番地）
毎日曜午前九時
毎土曜午後七時
毎月十五日午前九時慶信會
毎月二十八日午後七時靈學會

第二求道會（九段坂佛教倶樂部）
毎土曜午後二時

第三求道會（日本橋區茅場町說教所）
毎月二十七日午後七時

『歎異鈔』の枝折

「池山氏意譯「歎異鈔」の跋」

池山兄が意譯歎異鈔の初稿を書き上げられた時、直に私に示して意見を求められた。然るに愚圖々々して手を着けぬ間に、遂に出版校正の運になつた。そこで同信の親友として、曩に獨譯歎異鈔の序を書いた私は、是非とも再び意譯歎異鈔に何か書かねばなるまい、との督促を兄より受けて辭退する餘地がない。止むなく直に筆を採りて所感のまゝを書きつける。

熟々意譯歎異鈔を讀みもてゆく時は、歷々として非常なる苦心慘澹の痕が見える。そは忠實に本文を逐語譯にして、原文の意義を增減せざらん事の努力と、專門的佛語の解釋と注脚とを文中に入れ込んで、了解を安くせんとの用意である。是れやがて兄の溫潤含蓄なる德操と、慈愛親切なる人格の表現である。此點に於ては意譯歎異鈔は獨譯歎異鈔と同じく、確かに兄が歎異鈔の心讀體讀の發露であらねばならぬ。

併、私は未だ此度の意譯について、直接兄の述懷を親しく承る機會を得ぬが、獨譯が逐語譯たるにも拘はらず、意義の明瞭と、原文の風調を失はざりしと、解釋及注脚を本文より別立して、語勢の冗漫を避けたるに比較して、意譯が現代語を用ゐながら、頗る不利益なる立場にあることを御察しする。寧ろ全然信仰の見地より、思ひ切りて意譯して、本文の意味を痛快に徹底せしめ、解釋及び注脚を切り離して、原文の簡潔と跌宕とを寫すことに勉めてはいかゞ。勿論此の方法は本文多含の意義を害ひ、信仰的見解を局限するの非難は免れぬであらう。

即今咄嗟の場合、とても本文の調子を寫すことは出來ぬが、幾分か意味を通暢ならしむるために、私は讀みもてゆく中に、試に次の如く書きつけてみた。溫厚なる君は、或は寛宏の雅量を以て迎へらるゝかも知らぬが、却て大方の讀者より、完璧を傷くるの叱責を蒙るてあらう。是亦やがて人倫の弄言を耻ぢざる、無慚無愧の私自己の暴露であるが、他日再版の參考ともならば幸甚である。

第一章

惡ヲモオソルベカラズ、彌陀ノ本願ヲサマタグルホドノ惡ナキカユヘニ。

どのやうに惡いとても心配するに及ばぬ、彌陀の本願をあきれさし、負かして仕舞ふほどの惡はないから。(却て惡が本願に負けて、あやまりはて、御慈悲の廣大なるにあきれて、不思議と信ずるの外はない)

第二章

親鸞ニオキテハ、タヾ念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラスヘシト、ヨキヒトノオホセヲカウフリテ、信スルホカニ別の仔細ナキナリ。

親鸞自身は、御慈悲の念佛ばかりで阿彌陀佛が助けて下さるぞよとの善知識の仰を承りて、そのまゝ信じ、いたゞくほかに何んにもない。

第三章

他力ヲタノミタテマツル惡人モトモ往生ノ正因ナリ。

他力をたのみたてまつりて、惡人が惡人と分つたところが、正しくたすかる因てある。

第四章

淨土ノ慈悲トイフハ、念佛シテイソギ佛ニナリテ、大慈大悲心ヲモテ、オモフカコトク衆生ヲ利益スルヲイフベキナリ。……シカレバ念佛マウスノミヅ、スヱトヲリタル大慈悲心ニテサフラフベキト云云。

淨土の慈悲といふは、先づ自分が御慈悲の念佛をいたゞきて、命終り次第早速佛になりて、大慈大悲心があらはれて、思ひ存分衆生濟度が出來るのをいふのである。……しかれば御慈悲の念佛をいたゞくことばかりが、未通りたる大慈悲心てある。

第五章

イツレモ〳〵、コノ順次生ニ佛ニナリテタスケサフラフベキナリ。

何れも〳〵この次の生て自分が佛になりてみれば、自由自在に助けることが出來るのである。

第六章

自然ノコトハリニアヒカナハバ、佛恩ヲモシリ、マタ師ノ恩ヲモシルベキナリ。

眞の御慈悲がいたゞけたならば、師匠ぢや、弟子ぢやと爭はずとも、自然のことはりに叶ひて、佛の御恩も分かり、師匠の御恩も分る樣になるのてある。

第九章

佛カネテシロシメシテ、煩惱具足ノ凡夫トオホセラレタルコトナレバ、他力ノ悲願ハカクノコトキノワレラガタメナリケリトシラレテ、イヨ〳〵タノモシグオボユルナリ。

佛は前以て御見拔きなされて、煩惱具足の凡夫を助けると仰せられたのてあつてみれば、他力の悲願はなるほど(煩惱のために押へられて喜べぬ)かうした我等の爲であつたわいと、會得されていよ〳〵たのもしくおもはれるのてある。

(參考) 結文。彌陀ノ五劫思惟ノ願ヲヨク〳〵案スレバ、ヒトヘニ親鸞一人ガタメナリケリ。

第十章

念佛ニハ義ナキヲ義トス。不可稱不可說不可思議ノユヘニトオホセサフラヒキ。……上人ノオホセニアラザル異義ドモヲ近來ハオホクオホセラレアフテサフラフヨシツタヘウケタマハル……。

念佛には行者の左右の義をはなれたところが、そのまゝ如來の御はからひてある。何んとなればなんともかとも稱ることも、說くことも、心に思ひはから

ふことも出來ぬ廣大な御慈悲であるからと、聖人は仰せられた。……それを傳へられた上人の仰せにない、間違つた義の種々を近來は多く言ひ合ふて居らるゝよし、傳聞する……。

第十一章

信セザレトモ邊地懈慢疑城胎宮ニモ往生シテ、果遂ノ願ノユヘニツイニ報土ニ生スルハ、名號不思議ノチカラナリ。コレスナハチ誓願不思議ノユヘナレバ、タヽヒトツナルベシ。

不思議を信せずして、疑ひながらも念佛すれば、邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、疑ふものを飽まで御見捨なき御慈悲を以て、自然に疑を晴らして、果たし遂げて、助けねばならぬといふ誓願の御力で、遂に眞實報土に往生する事の出來るのは、畢竟疑ひながらも稱ふる名號の不思議の力といふもので、直に是れ卽ち誓願不思議のいたす所なれば、結局誓願不思議名號不思議は、同一と言はねばならぬ。

第十二章

經釋ノユクチ。　經釋のゆきみち卽ち行路。

マタヒトアリテソシルニテ、佛說マコトナリケリトシラレサフラフ。シカレバ往生ハイヨ〳〵一定トオモヒタマフヘキナリ。

又人ありて誹謗するので、釋尊が經文に誹謗正法と說かれた事が、眞實正確であつたわいと知られるであらう。此の如く佛語に虛妄なきことが分つて見れば、我等が往生も、佛の仰の通り間違なきゆへ、いよ〳〵一定といたゞけるではないか。

第十三章

彌陀ノ本願不思議ニオハシマセバトテ、惡ヲオソレザルハマタ本願ボコリトテ、往生カナフヘカラズトイフコト、コノ條本願ヲウタガフ善惡ノ宿業ヲコヽロエザルナリ。

彌陀の本願は不思議にあらせられるゆへに、惡を心配するに及ばぬといふは（まことの正しき信心にて、如何なる惡も本願をあきれさし、負かすことの出來ぬ、御不思議の力強さをいたゞきたる有樣なるを、言ひ枉げて）是もまた本願に心安だて過ぎた間違といふもので、到底たすからぬと斥けるものがあるが、此の申分は、本願（の不思議）を疑ふといふもので（結局惡を止めよといへば、止められるやうに考へてゐるは）善惡の所作は過去の宿業より來るもので、一分一厘も動かすことの出來ぬといふことを知らぬからだ。

コレニテシルベシ。ナニコトモコヽロニマカセタルコトナラバ、往生ノタメニ千人コロセドイハンニ、スナハチコロスベシ。シカレトモ一人ニテモコロスヘキ業緣ナキニヨリテ、害セザルナリ。ワカコヽロノヨクテコロサヌニハアラズ。マタ害セジトオモフトモ、百人千人ヲコロスコトモアルベシト、オホセノサフラヒシハ、ワレラカコヽロノヨキヲハヨシトオモヒ、アシキコトヲバアシトオモヒテ、本願ノ不思議ニテタスケタマフトイフゴトヲヽシラザルコトヲオホセノサフラヒシナリ。

「是で分るではないか。何事も心の思ふまゝに、自由に行へるものならば、たすかるために千人殺せといふたら、殺せそうなものである。されど一人にても殺すべき業緣がないから、殺せないのである。決して自分の心が善いから人を殺すといふ樣な惡事をせないのじやと思ふたらば、大間違である。夫故また自分では殺さないやうにと思へども、業があれば百人千人を殺すこともあるかもしれぬ」と仰せられたのは、我等の心の善きをば宿業とは思はず、我善を作せりと得意がりて、善のために助かる樣に思ひ、又我等の心の惡しきをば宿業とは思はず、我惡を爲せりと屈托して、惡のために助らぬ樣に思ふて、善きも惡しきも業報のために、如何ともすべからざる我等を憐みたまふ本願の不思議にて助けて下さるのである、といふことを知らざることを御諭し下され

たのである。

願ニホコリテツクランツミモ、宿業ノモヨホスユヘナリ。

願にほこりて罪を作るなら、やはり其ほこりて罪を作るいふことが、宿業のために催ふさるゝのである。

本願ニホコルコヽロノアランニツケテコソ、他力ヲタノム信心モ決定シヌベキコトニテサフラヘ。

本願にほこるこゝろのある様なものなればこそ、夫をかねてしろしめして、御見捨なき、他力をたのむ信心も決定出來るのではないか。

（參考）第九章　コレニツケテコソ、イヨ〳〵大悲大願ハタノモシク、往生ハ決定ト存シサフラヘ。

第十四章

一念發起スルトキ金剛ノ信心ヲタマハリヌレバ、スデニ定聚ノクラヰニオサメシメタマイテ命終スレバ、モロ〳〵ノ煩惱惡障ヲ轉シテ、無生忍ヲサトラシメタマフナリ。

一念發起して御慈悲がいたゞけたとき、金剛堅固の信心をたまはりたのてあれば、はやすてに正定聚の位に攝めとりて下さつて、娑婆のおはり臨終になつたのてあれば、其の一念にありとあらゆる煩惱惡障をそのまゝ轉じかへて、生死の絆をたちて、無生忍、卽ち無生のさとりを開くべき忍定を得たる資格を與へて下さるのである。

命終スレバの一句を、決して下に附けて讀むべからず。抑々平生の時善知識の言の下に、蹄命の一念を發得したるとき、下品下生の臨終を實現したるものなり。是聖人が信の一念に、前念命終後念卽生を談じたまふ所以なり。隨て無生忍とは、正定聚不退轉なり。無上涅槃ならば無生之生。若くは無生位といふべし。無生忍とは言はざるなり。

第十五章

コレヲコソ今生ニサトリヲヒラク本トハマウシサフラヘ。

三十二相八十隨形好をも具足して、說法利益さふらふをこそ、今生にさとりをひらきたる根本主眼とは申すべきてある。

第十六章

日コロ本願他力眞宗ヲシラザルヒト、彌陀ノ智惠ヲタマハリテ、日コロノコヽロニテハ往生カナフヘカラズトオモヒテ、モトノコヽロヲヒキカヘテ、本願ヲタノミマイラスルヲコソ廻心トハマウシサフラヘ。

日常如來の本願他力のまことの敎を知らなんだ人が、彌陀の佛智不思議に夜が明けて、信心の智慧をたまはりて、今までの様に自分て善を勵みて助からうといふ心得方では、とても御助けにあづかることは叶はないと思ひ知りて、從來の心を廻へして、本願をたのみたてまつる様になつたのを、廻心とは申すのである。

第十七章

邊地ノ往生ヲトグルヒト、ツヰニハ地獄ニオツベシトイフコト。

自力念佛を稱へて、化土の往生を遂ぐるひとは、遂には地獄に落つるといふ異義である。

蓋し是れ不徹底なる信仰を嫌貶するの餘遂に地獄に墮すべしとまで、極言するに至りしなり。如何にも自力念佛に止りて、佛智不思議を信ぜざるは大に誡むべしと雖、如來は如來を疑ふものをも斥けたまはずして、遂に果遂の願を以て、眞如門に轉入せしめたまふなり。然るに化土の往生を遂ぐる人は、地獄に墮すべしといふは、誣ゆるも亦甚しといふべし。

蓋し是れ念佛はまことに地獄に落つる業なりとの言をなしたるは、此思想より來りたるなるべし。（惡は往生の業なりとの邪說と同一主張なるべし）此と正反對の思想が、念佛は善なり、淨土に生るゝ業なりとの言をなしたるべし。蓋し第二章に「念佛ハマコトニ淨土ニムマルヽタネニテヤハンベルラン、マタ地獄ニオツル業ニテヤハンヘルラン、總シテモテ存知

セザルナリ」とは、此兩思想を非認したるものなるべし。

第十八章

比與ノコトナリ。

施入物の多少にひきくらべ、ひきたとへて、大小佛になるべしとなど、言ふたのであらう。

マツ佛ニ大小ノ分量ヲサタメンコトアルベカラズサフラフ。カノ安養淨土ノ教主ノ御身量ヲトカレテサフラフモ、ソレハ方便法身ノカタチナリ。法性ノサトリヲヒラキテ長短方圓ノカタチニモアラズ、青黃赤白黑ノイロヲモハナレナバナニヲモテカ大小ヲサタムベキヤ。

先づ淨土に往生して成佛する境界、卽無上佛に大小の分量をさだめるといふことがあるべきでない。全體かの安養淨土の教主阿彌陀如來の御身の有樣が說かれてあるが、それは衆生濟度の御身(爲物身)卽ち方便法身の御姿である。しかるに我等が安養淨土に到りて證する無上佛の境界は、方便法身の現したまひし本源たる、法性法身(實相身)であつて、法性眞如の本覺の境界に目醒めて見れば、長短方圓の形もなく、青黃赤白黑の色もなければ、何を標準として大小を定むることが出來ようか。

結文

當時ノ一向專修ノ人々。

親鸞聖人が法然上人に待して居られし時代の一向專修の人々、卽ち法然上人の御同門下の方々。

大切ノ證文ドモ、少々ヌキイデマイラセサフラフテ、目ヤスニシテコノ書ニソヘマイラセサフラフナリ。

大切なる證據となるべき文。卽ち聖人直々の御話になりたる御言を、少々拔き出したてまつりて、標準とする樣に、此書に添へておきました。

是畢竟前九章を指すものなるべし。而して聖敎の權實眞假を區別して、權をすてゝ實をとり、假をさしおきて、眞をもちゐるといふは、是れ卽ち『敎行信證』の眼目にして、顯淨土眞實敎行信證と題したまふ所以なり。而して敎異鈔前九章は、此聖人の御本意に從つて、直々聖人の御言を記憶のまゝ拔き出したるものなれば、實に聖人直話の簡潔なる『敎行信證』とも謂ふべし。宜なる哉、敎異鈔を熟讀するとき、敎行信證の蘊奧髣髴として眠前にさへぎるの感あること。予は敎異鈔を通じて、敎行信證の眞意を發揮感得せしこと、幾許なるかを知らざるなり。

猶此に注意すべきことあり。古來前九章と後九年を以て、恰も大學の經と傳との如しといふ。如何にも前九章は聖人の御言にして、後九章は敎異鈔著者の言なりといふ點は、酷だ肯たるものなれど、同時に大に混同すべからざることは、大學の經と傳との如く、前の九章を釋する爲に、後の九章を書きたるにはあらず。寧ろ敎異鈔と題せらるるまでに、此書の本領は後九章にあり。而して其異義を正すの標準として、前九章を擧げたるものなり。而して敎異鈔の著者は頗る明晰徹底せる書き振をなせるものにして、後九章を根本として、之が標準として前九章を返照せば各章相應して脈略貫通せること痛快極なかるべし。讀者心して熟讀自得せらるべし。

第十一章の標準……第一章
第十二章の標準……第二章
第十三章の標準……第三章
第十四章の標準……第四章
第十五章の標準……第五章
第十六章の標準……第六章
第十七章の標準……第七章
第十八章の標準……第八章

第十章は異義の條々を擧ぐる徵票にして、恰も冠頭のはしがきの如く、第九章は聖人直話の總結にして後九章の後尾に於ける結文に似たり。實に敎異鈔の前九章と、後九章は、合掌して兩手指々相合する如し。

煩惱具足ノ凡夫、火宅無常ノ世界ハ、ヨロヅノコトミ

ナモテ、ソラコト、タワコト、マコトアルコトナキニ、タダ念佛ノミゾ、マコトニテオハシマストコソオホセハサフラヒシカ。

煩惱を具足したる凡夫、火宅の如き無常の世界は、萬事、何から何まで、虛事、戯事ばかりて、一として眞實あることなき世の中に、此虛假不實を飽まで御見捨なき御慈悲の念佛ばかりが、眞實にてあらせられると、親鸞聖人が仰せられた。

後鳥羽院之御宇法然聖人他力本願念佛宗を興行す云云

此文は一本によりて附加せるものなれど、恰も「敎行信證」に於ける後序の如く、聖人流罪の事實を書きたるものにして、聖人信念の具體的實現なり。歎異鈔の眞信を體現したまへるものとして、仰ぐべし信ずべし。

大正九年五月十五日

近角常觀識

●簡明なる信仰

信仰は至つて簡明なるものである。內面的に、また外面的に、惡業に繫縛せられて、一分一厘の自由無き我等と、其の我等を引き受けて、何處迄も重擔として下さる大悲の御眞實と、唯それ丈けである。絕對不自由の我等、ひと度び廣大なる御眞實に引き受けられ參らせて見れば、最早やその中間に何等の問題もある可きで無い。何等の疑惧もある可きで無い。唯南無阿彌陀佛である、唯御眞實一つである。初めて有らゆる計らひより放たれて、自然の偉大なる御計らひに計らはれ參らせて、在らる可きやうに身を處して、歩々大悲の眞實に呼吸して世に生きる。斯くてこそ人生の相對に膠着して、離れ難かりし身も心もいとかろ〳〵と、初めて實際生活に於ても、『遣る丈けは遣らせて貰へる』心の餘裕を得させて貰はれるのである。若しこの外に『斯う分つた』の、『あゝ頂いた』の、『斯うある可き』の、『あゝある可き』のと、一點計らひの介在する餘地あらば、そは寧ろ大に警戒すべきであらう。信心は何か複雜玄妙の思想を經驗することゝ思うて居たら、寧ろ我等の複雜を如來に奪はれて、唯南無阿彌陀佛の一つにさせられて仕まうことであつた。唯感謝の單一生活にさせられて仕まうことであつた。南無阿彌陀佛々々々。（求道子）

攝取不捨の意義

一　攝取不捨

『觀經』にある『光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨』の文は信仰上重要故、運如上人も度び〳〵『御文』に引用してお出でになる。餘り『御文』に出て來る故眞宗信者は讀み慣れて却つて、其の意義が不徹底となり、『攝取不捨は遠うから光明中に居ることだ』となつた如きは、全くその意味を失つて仕まつたものである。

斯くの如き攝取不捨も親鸞聖人になる時は極めて重大なことゝなつて居り、聖人の眞宗としての著しきことゝなつてある。先づ『御文』にも出て來る聖人のお言葉には

來迎は諸行往生にあり、眞實信心の行人は、攝取不捨の故に正定聚に住す、正定聚に住するがゆへに、必ず滅度にいたる。かるが故に臨終まつことなし、來迎たのむことなし、云云。

之で見ると、未來必ず佛となる可き正定聚の人間と定まり、必ず滅度に到ることを得るは攝取不捨の故である。すると其彌々助かることに此世ながら決定する、その最も肝腎な處となつて來る。又『御一代記聞書』には

御たすけありたることのありがたさよと、念佛まふすべく候や。又御助けあらうずる事のありがたさよと、念佛まふすべく候やと、まふしあげさふらひしとき、仰に、いづれもよし、たゞし正定聚のかたは御たすけありたるとよろこぶこゝろ、滅度のさとりのかたは、御たすけあらうずることのありがたさよとまふすこゝろなり。云云。

極樂に往生して佛に成る方を基本として言ふ時は、『御助けあらうずる』である。けれどもこの世で助かつた、心に覺えのある方より言へば、『御助けありたること』である。その心に覺えのあるとこが攝取不捨となつて來る。又『歎異鈔』にも

彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて……思ひ

たつこゝろのおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

これから初つてある程であつて、故に古來信仰上の甚だ大切なる處となつてある。今日で言へば徹底した一念が攝取不捨である。故に何人もが之に至らんことを望み、光明中に生活するやうに成り度いと希ふのである。けれどもそれが容易に得難い結果が祕事法門なることが起り、人爲的のお授けで區劃を付けやうとするに迄至つたのである。然ういふとの起つたも、全くこの攝取不捨を際立てやうと仕たからであると言つてよい。

二　攝取不捨の概念

そこでこの味ひを成る可く分りよい處で申すとなるに、眞實ならぬ私に、何處迄も其の眞實ならぬをお見捨て無き眞の御眞實で向はれる佛のお慈悲である爲に、眞實ならぬ我々が終に佛のそのお眞實に觀破され、敗けて仕まつて――恰も佛と我々と角力である如く（他力は佛と私との角力である）我々罪惡の大關の奴は何處迄も敗けぬ積りて抵抗して行くのであるも、それを何處迄も咎めぬ極り無き佛の御眞實である爲に、終に如何に眞實ならぬ我々も其の御眞實に敗けて仕まつて、『恐入りました』となつたが、佛の御眞實が徹した時である。而して其の時は眞實ならぬ我々が、それに眞實にし、お見限り無き御眞實の中に、恐入り、抱擁されて仕まふ、そこの處の味ひなのである。近頃てはよく世間でも、この語がそうした味ひに、攝取さるゝといふ風に使つてある。こは學生諸君などは、餘りよくなけれども、我々の罪障を數學的にマイナスの數と考へて見られるがよい。佛のお慈悲はプラスの數である。マイナスにプラスが無限に加へられゝば、マイナスは消され、救はれて仕まふ譯けである。概念丈けは之でも分ると思ふのである。

處が修養では茲が然ういふ風にならずに、佛を我々の行爲の標準のやうにとる。佛は清淨である眞實であると見て、それに向つて此方もその如く仕て行くとるは、佛を手本視し、標準視して居るのである。得て然ういふ風になり易いは無理無い、修養では然ういふ風に說いて居るのだから。故に之だと向うに大きなプラスをこしらへ、それに到らうと努めれば努める程此方はマイナス故成り得ぬ〳〵と苦まねばならぬことになる。最後に標準の偉大を知れば知る程、自己の不完全を苦む丈けに終つて仕まふやうのことになつて仕まふのである。こは必ずしも修養のみに限らず、信仰でも『喜ばねば』『念佛稱えねば』になると、矢張りお慈悲を標準視して居ることになるのである。

三　善導大師の至誠心釋

處が之に無理無い處があると思ふのは、善導大師などの書き物でも、讀みやうによつては、矢張り之になつてある處がある。それは御存知の如く『觀經』に三心――一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心――この三心なることが說いてあつて、之に善導大師が釋をせられたものが、全體親鸞聖人が信仰を說かれた據處である。『信卷』などでも明にこの三心釋が根底となつてある。この『觀經』の三心が『大經』に來れば卽ち第十八願の至心信樂欲生の三信である。卽ち至心が至誠心、信樂が深心、欲生が廻向發願心である。――

こは全體經文なるものは、新聞を讀むが如く、誰が讀みても一應の意味は取れる。故に皆んなが平素分つた積りで讀んで居るのであるが、處が一つ本氣に讀むと實に恐ろしい程になつてある。私はいつも思ふ『大經』に四十八願、願々殆んど出任かせと思ふ程に說いてあるのであるが、それが次ぎの極樂を說いた所にゆくと、一々皆な願成就の文があつて、皆な生きてある。例へば無三惡趣の願があれば、後には『地獄餓鬼畜生諸難の趣無し』の文があるといふ按排に、殆ど差金を入れた如くになつてある。故に聖人は諸佛如來の眞說なりと讚仰なされた。今の『觀經』の三心でも、それが『大經』に來れば、斯くチャンと三信となつてあるといふ具合である。併しこは不思議がるのが可笑しいのである、合ふが當り前である。それはこの瓶に合ふ蓋に出來てる經なのだから。處で今の『觀經』の三心を善導大師が釋せられた、其の釋文が、至誠心とのことが、何うしても我々此方が眞實にすることゝしか一應の處では讀めぬのである。文を擧げて見れば

一には至誠心、至とは眞なり、誠とは實なり。一切衆生身口意業の所修の解行、必ず眞實心中に作すべきことを明さんと欲ふ。外に賢善精進の相を現じて、內に虛假を懷くことを得ざれ。貪瞋邪僞姦作百端にして惡性侵め難し、事蛇蝎に同じ。三業を起すと雖名けて雜毒の善と爲す。亦虛假の行と名く、眞實の業と名けざるなり。若し此の如き安心起行を作す者

は、縱使身心を苦勵して、日夜十二時に、急に求め急に作して、頭燃を炙ふが如くするも、衆て雜毒の善と名く。此の雜毒の行を廻して、彼の佛の淨土に求生せんと欲するは、此れ必ず不可なり。何を以ての故に、正しく彼の阿彌陀佛の因中に菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も、三業の所修、皆な是れ眞實心中に作したまひしに由つてなり。凡そ施したまふ所趣求を爲す。

何うしても之ては、佛の作された通り、我々も眞實にすると讀める。佛を念ずる者が不眞實ては可かぬから、眞實心中にするのだと讀める。また

又眞實に二種有り。一には自利眞實、二には利他眞實なり。自利眞實と言ふは、復二種有り。一には眞實心中に自他の諸惡及び穢國等を制捨して、行住坐臥に一切菩薩の諸惡を制捨するに我も亦是の如くせんと想ふ。二には眞實心中に、自他凡聖等の善を勤修す。眞實心中に、口業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を讃歎す。(中略)不善の三業は必ず眞實心中に捨つべし。又若し善の三業を起さば、必ず眞實心中に作すべし。內外明闇を簡ず、皆な眞實を須るが故に、至誠心と名く。(已上)

何うしても之ては阿彌陀佛を向ふに置いて之を標準とし、我々之を禮拜し讃歎し、佛の作された如く眞實にすると讀めるが當然である。故に青年の方は宗敎を之に讀む。又信者の人も之に取る。極言すれば法然門下の三百八十餘人は皆な之にとつて居つたのであつた。處が之がマイナスがプラスを標準として行かうとするのであるから、本氣に遣らうとすれば、彌々遣れ無いことを發見する外無いのである。私が苦んだも、宗敎とか理想とかを入れて、之を行はうとしたから、出來ぬに苦しんで仕まつたのであつた。

四　求道者の意中

處が親鸞聖人からは——茲が聖人の違ふ處、著しい處である——この至誠心釋の讀み方を常に言ふ如く違へて仕まつてお出でるのである。それは違つた意味を見出したからては無くて、自身に惠みの徹底を實驗せられた味ひから、さうなつて來たのである。そこを何から申さうか。

先づ今の如く向ふに佛を置いて、我々此方から眞實にすることが出來るか、出來ぬか、そこを經驗するで

無ければ他力は分らぬのである。先づ普通には神佛を信ずるとか拜するとか言ふ時には、我々の此方からそれに眞實にすると理解するが常識である。全體私は信仰の語を使つて居る。それはその方がよく分ると思うたからであるも、東京ではこの語を通俗語に、何でも拜むことに言うて居る。眞宗では普通には信心といふ。『御一代聞書』などに信仰の語があることはあるも、先づ一般には信心である。これは本統は信心の方がよい。私が用ゐた頃には青年には信仰の方が通りよかつたからである。今日に於ては不適切である。矢張り信心がよい。處がこのまた信心が世間では『あの人はなか〳〵の信心者ぢや』と、何か神佛を拜み仆してもすることの如く思はれて居る。故に青年の方が信心が出來ませぬ〳〵と言はるゝのは尤もである。青年が理由無しにそんな信心が出來るものて無い。故に茲は私の話てもよい加減の信心は出來ぬ方がよい。『イヤ結構だ』との早や呑み込みが一番困る。『信じられ無い』、『善く出來無い』、『難有く思へ無い』、それてよい。

處が茲て言はなくてはならぬは、斯く此方から眞實にし信心するので無いと申しても、皆樣の方ては直ぐ『けれども』といふ思想を出される、この點てある。『此方からするので無ければ何うするか、向うて何うか仕て呉れるのか』と斯れになりていかぬのてある。先づ大抵の方が自分の思ひてこしらへて信ずるのだと迄は思うて居られぬ樣てあるも、併し分つたら然ういふ風に思へさうなもの、有難いものが出て來さうなもの、さういふものゝ來るのが信心と、然ういふ樣に豫想して居られる。殊に求道の文字て來られる人は、彼處に行けば何かあるからそれを得度いもの。青年の方ならば信念が無くては可かぬから、それを體得仕度いもの。左もなくも內面不純粹て可かぬから、聞いて純粹になり度いもの。或はもつと實際的なのは、境遇上又は病氣等て困るから、信仰を聞いたらこの心が少しはらくになるだらう、ニコニコ出來るやうになるのだらう。と『ならう〳〵』て求道の花が咲いて居るのてある。斯う言うたが最も適切に皆樣の心狀に的るだらうと思ふ。

五　我々の至誠心

處て斯く『聞いてる中に何とかなるのだらう〳〵』て皆んなが押して行くからいつ迄もならぬのてある。そ

こて私が言ひ度いは、『それが何時迄もならぬのである』といふ一事である。すると皆様の方では『あゝ言うて、なるやうにするのだらう』何處迄もこれで取られるから仕やうが無い。後には私腹立てゝ叱る。すると又『叱りて下されて難有い』と――之が皆な何時の間か自分の思ひて拜んで仕まつて居るからこれになる。故に私は然ういふのに對しては飽く迄もひどく言ふ。すると仕舞ひには腹立てる人がある。いつかも大分の人が聞きに來て、『御慈悲のことはよく分つて居るのだけれど、何うもあとが善く出來ぬで困る〳〵』と、餘りにそれを言はれるから、私『貴方は御慈悲のことが分つて居やせぬ』といふ。『一念の徹底が無くて、あとのことが出來ぬ譯けだ』と、やつて仕まつた。すると其の人、『如何にもひどいことをいふ。自分だとて、學校出てから十何年宗敎のことに就事し、信心のことは分つて居る、餘りにひどい』と、この腹立ちが起つて來た。處へ一方からは『これは聞きに來て居る先生に、こんな心を起す、これは可かぬ』と、――これが拜めぬとこに出て來たのである。處が容易に茲に氣が附き難いのである。先づ大抵の人が出來ぬ〳〵と言ひながら、矢張り自分で何とかしてやる積りて居る。例へば世間でも借金で困りて居る時に、一方が親切に引き受けやう〳〵といふ。けれども此方が疲せ腕ながら何とか自分で始末しなくてはと、この腹がある限り、何程親切に言はれてもチットも響かぬ。同やうに我々此方から眞實にする腹がある限り、佛の御慈悲は聞けぬのである。そこで之が我々の至誠心である。これで本統に遣れるか。遣れば遣る丈け遣れ無いことを發見するばかし、爾らば遣れぬで頭が下げられるか。遣れ無ければ猶ほ以て遣ら無くてはとなるばかしてあつて、之で我々轉換の仕て見やうが無くなつて居るのである。

そこて肝腎は斯く我々、飽く迄自分が眞實て行く積りであるも、それが出來ぬことに突き當る、茲てある。私如きも自分の出來ぬことに、行きついたのてあつた。處が之れ言ふと青年の方は、『爾らば我々はまだ出來る氣があるから、遣る丈け遣つて苦しんだら、それになれやう』と、之に思はれるが多いのである。我々眞實に出來ない事實にぶつつかつて、出來無いことが分つたとて、出來無ければ猶以て出來かさなくてはと考へる人間てある。故にそこは自分の思ひよりも、事實出來て居ぬことに着目仕なくてはならぬ。

六　岩本氏等の例

そこて彼の大阪の岩本氏は市に百萬圓の公會堂を寄附し、その外色々の事に盡くされたのであるが、一朝自分の商賣上の事に蹉跌し、其の時は以前立派に遣つて居つた丈け、殊にそれが人の目に立つた仕事てあつた丈け、今の不義理が猶以て悲しい。終に何とも相濟まぬと自殺して果てられたのてあつた。この事は今日一面からは慥に感心な出來事てあると言つてよい。現に一方には實業界の乃木將軍てあるとの說すらある。處て今言ふのは例としてゞある。同時に一面さういふ場合を通る話をするの故、それは金に限らず、我々が義理上、責任が立つか立たぬかとなつた時には、借金を持つたも同じなのだから。そこて今この時にこの苦境を見てくれた友人ありて『それを自分が引受けやう、心配すな』假に然う言うて呉れたとしても、岩本氏如き眞面目な人は、『それは友人は出しても呉れもせう。けれども自分のことは何處迄も自分て始末仕無くてはならぬ』と、これが岩本氏の苦まれた心持ちであつたらうと思ふのてある。成る程『自分のことは自分て仕無くてはならぬ』言や勇壯て眞面目てある。けれどもこの心てある限り、折角親切に考へた友人も、之ては取りつけぬ。折角の同情も之ては水泡に畢つて、何時迄も話が決まらぬて無いかと申すのてある。そこてその岩本氏の心に句切りを附けさする爲には友人の方は斯う言はなくてはならぬ。『君自分て仕ます〳〵て、一體何うするのてすか』『イヤ別に考は立たぬも、併し自分のことだから自分てせんければならぬて無いか』『イヤそれは分つて居るも、けれどもせんければならぬと、出來るとは君違ふて無いか』と――。

話しながら思ひ出す。近頃は普選の神樣、尾崎、犬養の諸氏がまだ福澤先生の門下に居られた時分、年末になつて喰ふ物無しに、頻に天下國家を談じて居られた。福澤先生がそれ見て、『それもよいけれど一つ自分のことも考へたら何うか』『イヤ先生、自分の事や妻子のことは一家の私事です。我々は石を嚙み砂を喰つてもやります。』すると福澤先生が『之は怪しからぬ、石が喰へますか、砂が喰へますか、一つ喰つて見せて貰ひませう。』之には流石の人達も困つたといふ話しが

ある。同やうに『君、遣ります〳〵て、大方この上君のすることは自殺するのだらう。遣り給へ。併し君死ぬとチットは君の責任がすまされるのですか』と。或人之れ聞いて、死を以ても自分の責任は果されぬといふことに氣がついて、佛の眞實を喜ばれた事があつた。卽ち『死を以ても君が何う仕やうやうも無い、そこを氣の毒と見たから自分が引受けやう』といふ先方の友情である。これ聞かされても猶ほ自分が遣りますが言へるかどうかといふのである。猶ほ今の尾崎氏等の話は、之で大に困り、家に歸つて見たら先生の方から、既に年末の拂ひが送つて來てあつたといふ話である。この送られる眞實があつて、よい話だと思ふのである。これは實話ださうである。

そこで今の『遣ら無くてはならぬと、遣れるとは別である。遣ら無くてはならぬが遣れぬのが氣の毒故、それを引き受けやう』――之を先きの大分縣の人の場合で言うと、一方に腹立て反抗して居て、一方に『イヤ聞きに來てる先生に之ては可かぬ』之が行きも戻りもならなくなつた處である。處が『それは可かぬ』と私は言うので無つた。『イヤそれが自分にも經驗がある。それを惡くは思はぬ』と、是を言はれると、如何にも意外である。故に有難くなつて信仰に入るのでは無い、此方は可かぬこと仕て居るに、(自分で遣れぬは可かぬのである。)案外にも『それを惡しくは思はぬ』と。之が分ると、これは有難いと之が信仰に入つたのである。處が皆んなが水族館の金魚で硝子戸に衝き當り、行くことが出來ぬのに、行ける〳〵と思うて居るのである。故にそれを行くと衝き當つて死んで仕まふ。皆んなが人生とて信仰とて、行けぬとこを行かう〳〵と仕て居るのである。然るにその行けぬとこを見て下されたから、大悲の救ひが現はれた。其の救ひは皆んなが行ける〳〵と刃向ふのに呆れず來て下された眞實であるから、『御前、俺に有難いと一言いへ、救うて遣らう』と、そんなことは一言も無い。爾るに皆んなが『有難くなつてこそ』『何うかなつてこそ』と、矢張り何處迄も自分が何うかなれて行く腹で居るのである。

七　自力と他力

そこで親鸞聖人は之を自力と仰せられた。も一つ言ふと自力と他力と二つ力があるのでは無い。人生には絶對の他力の以外に力は無いのである。然るにその他力を知らぬ者が、自分の思ひで行けると思うて居るものが自力である。故に自力は思うて居る迄で、本統にさういふ力があるのでは無い。こは自力他力の來た歴史から見ても、龍樹菩薩の言はれた他力は、力の強い者は自力で行け、獰弱怯劣の輩は他力に據る外無いて無いかと、寧ろ本義は自力にあつて、他力はそれで行けぬ者の爲めとやうにある。處が、それが時を經て聖人に來ると

聖道權假の方便に、　衆生ひさしくとゞまりて、
諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ。

全體聖道自力などと、然ういふ道が本統にあるので無い、權假方便の道であつて、出來ないことなのである。爾るにそれから離れることが出來無いて皆んなが惱んで居るとの御言葉である。故に未だ他力に目醒めぬ人間が、出來もせぬ小さな力を振舞はして力んで居るものが自力である。言はゞ我が身知らずとか、我慢とかの言葉が自力である。處がそれて斯く死んでも遣ると力んで居る處へ、一方から然うやつて見ても、それが何の甲斐も無く終つて仕舞ふ處が可哀相故其の者を哀み悲み、何處迄も捨てぬ。この悲願の一乘に遇ふものの故に『有難い、今迄然ういふ深い處を見て下された御眞實とは知らず、自分の我慢て力んで居つたのが濟まなかつた』と。で今迄自分の眞面目といふ處より押すと、『設へ一身を投げ出してゞも眞實にやる』自力はその頗る善かつたのであるが、一度びこの絶對他力の御慈悲に遇ふと、『然ういふやうに自分の自力て力んて居つたのが惡かつた』と、忽ち電の消ゆる如くに他力に一轉して仕まふのである。

近頃は兎角に社會の各部面に、各自に自分の方が正しい〳〵と、互に自力て突つ張り合ひを仕て居るものが此頃の勞働問題、思想問題である。之が各自に然ういふやうに自分の思惑で遣れる〳〵と思うて居るのが、それて遣れぬを見て下さる御慈悲の下に頭が下りて、恐入りましたとなつて來なくては、調和の時が來やう筈は無いのである。こは言うてる私自身がうつかりすると、この他力がよいの自力を主張することになるから、そこは見て下さる方て注意して頂かなくてはならぬ。皆んなが自分の方が惡いとは思へぬから、身體が疲れやうが滅びやうが、何處迄も遣ると思うて居るのである。處が然ういふやうに思へる、そこに眞の

意味からは間違ひがあるのだから、そこに注意仕なくてはならぬ。

八　他力の罪惡觀

そこで他力の罪惡觀なることは――罪惡觀は信仰といふと同じで、我々の自分の頭の下る處である。所謂機の深心で、他力に於ては最も肝腎の處である。――我々が自分で惡いと思ふことから出て來るので無い。この他力の惠みが來ると、ひとりでに分つて來るが罪惡觀である。それを、何か惡いことでも仕たら、自分の惡しさが分つて、信仰に入れ樣と思ふ人のあるは間違ひてある。此間も或人が『自分の醜い姿を見せて貰ひました』と言はれたが、この一言が價値がある。誰とて自分の顏は見えぬから、皆んな綺麗だと思うて居る。監獄の囚人は自分の惡いことを知らぬから、改心とは何を意味するかと思うて居る。『松かげの暗きは月の光かな。』光が來る處で、暗いとは分つて來る。故に我々が自分は行き詰つて居て、猶ほ夫れて遣らうと思うて居る、それに呆れず眞實にして下さることが現はれて來る處で、『自分の思惑が惡かつた、申譯けなかつた』は分つて來る。それを大抵の人が『まだ自分の煩悶の仕やうが足らぬから』といふ風に思はれるは、それは私の書き物にもさういふ風の誤解を與へる點がある。私が苦んで信仰に入つたといふから、あのやうに眞面目に苦みてこそと、然う取られるは無理無い。故に中には氣の毒な程苦しんで居て、『まだ煩悶が足らぬから』と言はれる人がある。併しそれはまだ道樂の仕やうが足らぬから、親の慈悲が分らぬと言ふと同じであつて、甚だ變なことになる。それが何か信仰を、煩悶でも仕て磨き出すが如くに思うて居るから、それになる。こは信者の人でも、我が身の惡しさが本統に分ると、お慈悲がそこに閃き出すものゝ如くにも思うてる人がある。故に最後の斷案を下すと、

我々それで何程苦まうが、求めやうが、何時までも何うにもならぬのが、我々の炭の塊、鐵の性である。佛性など、何んなことあつても、我々の內にあることと無い。そこは恰も糅種を煎り焦すが如し。併し如何に焦げついた炭にも火をつけることは出來る。炭から火は出せぬが、炭に火をつけることは出來る。それは此方が限り無きマイナスの炭の故、その炭が氣の毒とそのマイナスを何處迄もお見捨て無き御慈悲の火のプラス故。處が茲を皆んなが自分で何か持つて來て、自分のマイナスがプラスになることのやうに思ふから、取れぬ。此の間も或青年が自分が惡い〳〵と苦しんで居るのに對し、友人が『君のその惡いのを惠みんで下さる慈悲』といふ。すると、『イヤこれ程惡い處へ、この上惠まれたりとすると猶ほ困る』と。それは此方が借金で困つて居る處へ、猶ほ金を呉れたりすると、よけ借金がふえて困るにとるから夫れになる。處が今他力は此方が限り無きマイナスで渴し切つて居る處へ、その渴くのが哀はれとの眞實の水を無限に差し向けて下さるかプラスである。我々は濁り水である、佛は清淨の水である。佛の清淨の水を貰へば、此方の濁りが清らかになるのだと、茲を然うとるから分らぬ。清淨とは我々の濁りと對比して言ふ言ては無い。綺麗なとは、如何な清らかな水でも、我々の濁りの中に這入れば、濁されて仕まふに決つて居るのである。けれ共如何程濁されてもその濁す性分が哀はれと、其性分を斥けず、無限にその者に入り込まうといふ實意が綺麗といふことである。無欲とは欲の深き者に如何程でも呆れず施しを仕て呆れるといふことが、無欲といふことである。故に如何程でも無限にされるの故、如何に濁りの水の我々も、終に同化され、淨化されて仕まふ。處が斯れいふとまた、『今はいかぬけれども、之が漸々に』と、然ういふ風に取られて可かぬのである。

以上要する處、我々何處迄も責任を立て、眞實に仕てと言つてるのであるけれども、それが本統には出來ぬことだと申したのである。然らば出來ぬと唯潰した丈けか、否なその『出來ぬ、可かぬ』を斥けず、それを何處迄も引き受けやうとの御眞實である。故に信仰問題でも皆樣が頂けぬで可かぬと言はるゝを、それを御慈悲は可かぬと斥けらるゝので無い。『其の可かぬが氣の毒故その汝を何處迄も見捨てぬぞ』故に徹底し、喜びて信仰に入るので無い。喜べず徹底せざる罪惡の塊りの消極の我等が、それをお見捨て無き大悲の積極で、終に積極にされて仕まふのである。

九　心ぞこに隱れて居る思想

以上は大分客觀的の言ひ方となつたが、猶ほ青年の方には、私自身は小供の時より聞き慣れて居たから分つたかも知れぬも、我々には分り兼ると言ふ人があるかも知れぬ。私自身が矢張り長らく自分を犧牲にし、自

分て眞實に仕て行くと思うて居つたのであつた。故に私も自分の穢い方は初からは分らなかつた。至誠でやれば至誠は通るから、何程人が惡しく思はうと此方からはそれを惡しく思はず至誠に遣ると、遣つて居つたのであつた。處が此方が誠にする程に人は誠にせぬ。人の面白く無いことが段々多くなつて來た。『人は自分を輕蔑して居る。』『人は冷かなものである』『これでは人の埋め草にされて仕まふばかしである』無暗に人が人がといふことになつて來た。處がもと〳〵私の理想は敵を愛するにあつたのである。然るに現に斯く人を惡しく思ひ出したの故、『これは自分がをかしい。これては今迄のが犧牲的に、献身的になど、皆な誠であつた』と、之で私は苦み出したのであつた。現に其の時母は言うて呉れた。『お前は今迄遣る丈け遣つたのだから、悔まなくともよいて無いか』と。言はれて見ればその通りである。けれども私のは『今迄自分が遣れてると思うて居た其のものが、斯うなつて見ると皆な人に見て欲しい爲め褒めて貰ひ度い爲め遣つて居つたのであつた。斯んな穢い心で遣つて居て、人を腐敗して居ると言うて居た自分が腐敗して居たては無いか』となつて來たのであつた。斯れいふとまた然うならなくてはと取られるか知れぬが、そう取られてはいかぬ。成る程自分等もと、茲は皆樣の御同感さへ得ればよいのである。そこて私は自分が眞實にされると思うて居た間は、努力が利いたのであるが、その私の眞實は皆な名利となると、もう仕やうが無い。併し自分の本統に仕やうが無いことは、矢張り分らなかつた。矢張り何うかしてよくなり度い〳〵の思ひがあつた。善くなるには善くせねばとなるが、その善くが私のは皆な名利となつて、茲がグル〳〵廻はりとなつて、もう仕やうが無い。『惡くて困る〳〵』と、茲から何うしても出ることが出來無つたのであつた。

それは人間に一つの妙な性がある。『惡くて困る』といふ裏には、『こんな惡い心て人に向ふと、あんな惡い奴は可かぬと、必ず人に斥けられる』と、言葉にこそ出さぬ、心底に皆な之が控えて居る。新聞に惡口書かれるのがイヤなのは、本統に惡るければ書かれてもよささうな者であるに、矢張りそれがいかぬのは、世間一般からも惡く思はれて仕まふのがいかぬのである。又本統に惡くなかつたらそれても書かれてよさそうなものであるに、矢張りそれても惡く思はれ度く無い。人生の曲折、皆なこの人に惡しく思はれ度く無い處から起つて居るのである。或る眞地目な方が、私共の一生懸命は宛然芝居のやうだと言はれたが、そこになると本統に我々は、このよく思はれ度い爲めに、血眼になつて骨折つて居る。故に惡く思はれたとなつたら、それこそ我々の致命傷である。故に新聞屋はそこを旨く利用する。それは世間であるが、道德に於ても矢張りこの惡くては可かぬが道德の根抵である。その可かぬは結局何者かに、彼奴可かぬとされて仕まふから。故に小供の時より『そんな事すると人が笑ふ』て、私共大きくなつて居る。昔の借用證文に、返却されぬ時は衆人公座の席にて御笑ひ下され度くがあるが、昔の人の廉潔など、皆なこの笑はれ度く無い爲めであつたかも知れぬ。そこになると今日でも評判が欲しい爲め政治宗教乃至今日の色々の思想運動など遣つて居るかも知れぬのである。

一〇　私が眞實に氣のついた順序

そこて私は一面人に善く思はれて居るのが苦しい。前ならばよかつたかも知れぬも、斯んな穢い心で遣つて居つたのを眞面目など思はれて居て實に苦しい。出來るなら褒めて呉れる人の前に、斯んな穢い心であつたと出して仕まい度い。併し出すと、『然うか、君そんな心て遣つて居つたか』となると、もう取返しがつかぬと、茲頻るをかしな狀態であつた。之が結局何を求めて居たか。惡いと出すと、惡いは可かぬと斥けらるゝ故立たぬが、『我は君のその惡いを同情する故、惡いを惡いと斥けぬぞ』と、斯の同情が欲しくてならなかつたのである。

之は分りよく言ふと我々の信仰問題でも、信仰が得られぬと必ず人が可かぬと言ふと、斯の思想しか無いのである。そこへ何程求めても善く出來ず、得られぬのであるから、その爲めに立つ瀬が無い。故に其處へその得られぬを惡しく思はぬとのお眞實さへ來て下さればよいのてある。こは實は私が人に然うしたかつたのであつた。何處迄も人の惡しきを惡しく思はず、敵を愛し、眞實て遣り果したかつたのであつた。處がそれが此方が敗けていかぬやうになり、囚人を感化せんとして此方が囚人になる。遣り果せればよかつたのであるけれども、言うてる自分が人が〳〵といふことに

なり、出來無いことに行き詰つて仕まつたのであつた。故に人間の思惑は出來無いとのとこに捧打つて仕まふのが他力である。

そこで私はこれ程に冷く、穢い、不實な自分であるがこの私の冷いのに同情して、此方はこの性分故刃向つて行くが、それに惡しく思はず斥けず、飽く迄も見て呉るゝ友人が一人あるならば、立つ瀬があらうと、斯れになつて來た。言ひ換へれば右も左も皆な敵の、この冷い、心細い人生に、私がこの性分故皆な遁げて仕まふが、誰か一人『それは分つて居る、能く理解する故同情こそすれ斥けはせぬ、言ひ度いことは何なりと出し給へ』この友人があれば生きて行く瀬があらうと、斯う言へばよく分つて貰へやうと思ふ。之が本來佛は人生を超絶したものであるが、餘りに懸け離れてる故、私は寧ろ然ういふ風に思うて行つたと申すのである。そこで氣づき出したがそれが佛であつたことであつた。それ迄思うて居た佛は生きた問題に觸れなかつたが、その時氣がついたは、佛が惡人を助けるといふが、今私が如何にしぶとく、何程受け入れまいがそれに呆れず、その仕方の無いが可哀相と、この私が人に相手にされぬ處を見て下さらうとの、極りなき眞實の友人が佛であつたと、斯れてあつた。

處で斯く言うと青年諸君は茲て、『其の佛が何處に在る』と言ひ度くならせぬか。それは今私が火を押つけやうと仕て居るに、その火が何處に在るといふやうなものである。今私が斯く申上げて居るこれが佛の御心なのである。

一一　攝取不捨の意義

そこで之を宜べられたが、『光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨』の文である。――『光明遍く十方の世界を照し』は、私は先きに我々の罪惡がマイナスだと言つた。けれども茲になると我々の善もマイナスである。善も惡も有限の數は皆なマイナスである。故に善惡共にこの無限絶大のプラスに遇ひて消やさるゝ。卽ち我々の善惡を共に消して仕まふ處の光明である。故に『歎異鈔』には

本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に。惡をもおそるべからず、本願をさまたぐるほどの惡なきが故に。（一章）

若し然らずば宗敎は惡人を救ふが、善人を救ふとはならぬ。我々の善は百二百の善があると恃んで居ても、そこへ三百の惡が來れば惡に覆つて仕まふ善である。そんな善は何にもならぬ、有限のものである。故に我々の善てあれ惡てあれ――そこになると我々、『拜める』の、『喜べる』の、『稱えられる』のと、そんなものは皆な定散自力の善である。故に其の者がこの眞の惠みを聞くと、『今迄それしきのことを善く出來てると思うて居たのが濟なんだ』と善人はその善の心を靡し、惡人は又『そんなに惡しくては可かぬと、小さいことに思うて居つたのが濟まなんだ』と其の惡を靡へし、善も惡も共にこの惠みに救ひ取られて仕まふのが『光明遍照……攝取不捨』である。――

全體この語は他力の至極を表はしたのであるが、善導大師の言葉に

弘願と言ふは大經の說の如し。一切善惡の凡夫、生を得る者は皆な阿彌陀佛の大願業力に乘じて、增上緣となさゞるは莫し。

卽ち善も惡も――又『大集經』の文には

妻子珍寶及王位臨命終時不隨者

茲迄來れば我々の妻子も財寶も――世間では妻子を愛し慈むは人情の至極とされて居るのである。故に韓退之は夷狄の法は人情に背くと攻擊した。けれども必ずしも惡のみに限らず、世間で善とされて居る處の我々道德上の善も、乃至妻子、財產、榮譽榮華、皆な夫れが賴みにならぬを賴みと仕て居るが可哀相故、――我々人間と生れて然ういふ賴み無い小善を力と仕て居るはかない樣が可哀相故、其仕方の無きを何處迄も捨てぬの大慈大悲の光明は、遍く十方世界を照し、如何なる闇をもその隅々迄照破する日輪の光に遇へば、その仕方の無い我々の闇みが何うなるか。善を賴んで居つたその心が何うなるか。如何なる惡しきも、この惠みに轉じ代はりて仕舞ふて無いかと、茲が言は無くてはならぬのである。『和讃』には

凡夫善惡の心水も、
彌陀智願の廣海に、
歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる。

併し茲は『この惡いのが善き心に代はるのだ』と取られてはいかぬ。從來の信者流に『惡しくてもよいのだ』であつてはならぬも、私のを讀んで下さる程の人は、惡しくて可かぬ〳〵て苦んで居られるが多いのである。故に『其惡しきに呆れぬのだぞ、惡しく思はぬのだぞ』

と、茲如何なる我々の冷きもれそに同化させる迄の溫き惠み故、茲はらくに受けなくては可かぬ。先づ諸君は『何う聞いてもそれになれませぬ』と、之が一番言ひ度いのだらうと思ふ。誰がなれと諸君に申したか。それ迄に思うてもなれぬ、その冷え切つたを哀れみ、其者をお見捨て無いが大悲の御眞實だと申して居るのである。私なども茲で、徹底しなかつた。『友人があの通りに親切に仕て呉れる、あれに有難いと一言いへれば』と、それて何うしても分らなかつた。處が友人の方は『君に喜んで貰はうとて、誰れが世話するものか。』衷心からの念佛が出ぬといふも、それが出ぬから見やうと言ふのてある。人に喧嘩が止まぬ、それは無理無い修羅の人生だものと、これが無碍の光明といふことなのてある。

故にこの光明に遇へば、それは如何にも澤山の我々のマイナスてあらう。けれども如何に限り無き善惡マイナスの心水も、品川沖に流れ込めば、もとの水を離れて鹽水なるものが出來るのて無い。故に斯く飽く迄呆れ給はぬ慈悲に遇へば、これ程迄の御眞實てあつたかと、其の者がこの徹底の一念には思はず南無阿彌陀佛——それが『彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひ立つ心のおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめ給ふなり』(歎異鈔一章)——これが『光明遍く十方の世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てず』攝取不捨の意義は是てある。之が誤ると、念佛する者を捨てぬの意味に讀める。然らず、攝取不捨はその眞實が、眞實ならざる我々の心に徹して、——恰も辨圓が聖人を殺さうと待つて居たのに、それを可哀相と見て下さる聖人の眞實が辨圓の心に徹したもの故、出會頭に殺さうと思うて居た辨圓が害心たちまち消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし。やゝしばらくありて、有りのまゝに日來の宿讐を述すといへとも、聖人又おどろけるいろなし。

(御傳鈔)

この呆れぬお慈悲に遇ふたもの故、その奴が寧ろ默りて居られ無くなりて、日來の宿讐を申述べて懺悔する。其如く默りて居られ無くなりて、その時に思はず南無阿彌陀佛が現はれて來る。嘗つて或る眞地目な方が、基督教に行かうか佛教に行かうかと、まだ惑ひつゝ會

館へ聞きに來て居られた。その方の問題は自分の心がカサ〳〵して、潤ひが無くて、人に接するに如何にも冷い、それが其方の悲みであつた。そこへ私が、それが潤ふのて無い、溫くなるのて無い、その君の乾いた、カサ〳〵したのを氣の毒と、何處迄もそれを汲み取つて、それに溫く向つて下さるお眞實と、それが其の方の心に聞えるなり、未だ嘗つて言うたこと無き南無阿彌陀佛が、思はず口から迸り出た。即ちそれが『……念佛申さんと思ひ立つ心』てある。その心の『起る時攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。』これが他力の念佛てある。『和讃』には言はく

眞實信心の稱名は、　彌陀廻向の法なれば、
不廻向となづけてぞ、　自力の稱念さらはるゝ。

即ち如何に我々不眞實の大關も、佛の眞實の大關に敗れて、恐れ入つた一念が、南無阿彌陀佛。その徹底の一念には攝取不捨の光明中に入らしめて下さるのてある。故に徹底した教と言ひても、これ程の徹底した教は無いのてある。

一二　人生を超絶するの力

以上で信の一念の味ひは大略申述べたのてあるが、猶ほそれと人生の關係につき一言仕なくてはならぬ。この講話は大體我々の眞實て佛に向ふといふ處から申したのであつたが、斯く我々が宗教に對し、乃至その外に對し眞實にせねばと考へる、それが皆な我々の五分々々の心なのてある。即ち『斯んなことては人に惡しく思はれはせぬか。』『これてはまた本當になつて居ぬては無からうか』と、善惡一つて心配し、苦しんて居る旅人なる私一人が居つた譯けてある。茲て人なり、外界なりに目を著けては可かぬ、茲て人が來るから賑かになり、らくになるのなら、信仰に來られても何にもならぬ。皆樣が信仰聞かれた處て、人なり外界なりは何うにもなりやうは無いのてある。それは成る程外界の風雪は寒からう。恰も日野左衞門の門前て風雪に惱まれた聖人の如く、人生に寒むがつて居る我々旅行者てある。その寒き我々に、其處へ我々のその凍えた限り溫めて呉れる一人さへあればよいのてある。茲へ見當をつけなくてはいかぬ。爾るに『先生、私も聞くが家内にも聞かせて下さい』などと、人のことなど要らざることてある、自分さへ溫かになればよい。自分さへ溫めて貰へれば如何に外界が寒からうが遣つて行

ける、そこが信仰の有難い處である。若しそれが遣れぬのなら、人生に宗教は無意味である。

處て斯程迄に何處々々迄も溫めて下さる眞實に遇へば、それて我々人生を超絶さるゝて無いかと、茲が言ひ度いのである。信仰はこの相對人生が、絶對と連絡さるゝ處に旨味がある。若しそれが絶對と離れて人間に着き、人間に理解を求めねばならぬのならば、斯くの如き宗教は唯社會事業たるに止まる。私は然ういふ人生に着する宗教を否定する。故に斯くの如く冷き、愚癡の止まぬ、名利心の强い、其の心淋しき我々が、それに何處々々迄も遣る瀨無く向つて下さる眞の惠みの火によりて無限に溫められ、恐入つて溫くなつた心持は、我々凡夫の凡心が佛心に一致したと謂つてよい。

蓮如上人の『御一代記聞書』には、

衆生をしつらひたまふ。しつらふといふは、衆生のこゝろをそのまゝおきて、よきこゝろを御くはへさふらひて、よくめされなし候。云々。

茲廣大なる眞實に融かされ、人生に超絶させらるゝ處が値打ちてある。それは我々の、このお慈悲で腹のふくれた處てある。『あゝ斯う今迄出來可らざることを求め、人に不足言うて居たも、この御慈悲一つて腹ふくれた』となり、『成る程この惠みて無くては安心されぬわけであつた。それを今迄親に、家人に、友人に求めたが、それは佛て無き限りある可らざることてあつた。成る程廣大のお惠みが有難い』と、惠み一つに生きた處てある。殊に御婦人などは、人に『好くせねば』『好く出來ぬ』て苦心せらるゝ。それは自分が佛にならうといふとてある。爾るに御慈悲に氣づかして貰ふと、『その如く人に滿足されて自分が滿足する迄遣らうなどとは、我が身知らずの骨頂てあつた』と、茲て善し惡し人生を超絶して、眞の惠み一つに生きるのてある。

抑々先きの『歎異鈔』文に『彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、』——往生とは何か、言ふ迄もなく極樂往生てある。それを聖人は斯く信の一念に言うて居られる。信の一念に我々極樂へ參つてなど居ちぬ。猶ほ言へば法然上人の前て、體失往生不體失往生の議論があつたといふのてある。それは他の弟子方はこの身體が亡くなつた時往生すると言はるゝ。それに對して聖人は、否、不體失往生てあると。それは何か。我々この眞實の惠みに一致し、眞の惠みに攝取された一念に、極樂に往生すべき身となるのだから、是れがある。も一つ言ふとそれは其の一念に、極樂に往く可き身と生れ代はるといふことてある。斯く我々の往生は惠みと一致の一念に定まる。故に聖人は、

超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ。

これが人生に超絶の味ひてある。之があるから宗教が人生に力がある。また聖人は、

過淨信を獲れば、是の心顚倒せず、是の心虛僞ならず、是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るなり。（信卷）

とも言うて居られる。

一三　綱つけられたる猿

猶ほも少し言ふと、これは人生に五分々々の考を斷ち、心て人と五分々々の喧嘩をば仕無くなる處てある。若しこのお慈悲で我々五分々々の根を斷たれるて無き限り、設えば私が苦しんだ時、あの儘苦しみ〳〵死んだにせよ、思ひ丈けは殘る道理てある。處が一念この御慈悲て、我々心の底から充たされたとなると、今迄のこと殘らずが『山は山、道は昔にかはらねと、變り果てたる吾が心かな』殘らず今迄の善し惡しが消失して恩怨一如。迷ひの根を斷られるとは茲のことてある。處が從來の信者の信仰てはこゝが理解されぬ、佛を拜みつゝ『娑婆に居る間はこの思ひは止まぬのぢや』などと、それは得手勝手の使ひ分けといふものてある。信仰の結果は確に斯く人生から超絶さるゝ。斯の超絶の力は、それて人生に生きて行ける處が信仰の値打てある。私は必ずしも信仰に入ると悲しく無いのだとは言はぬ、冷くないのだとは言はぬ。併しこの冷い限りを同情して下さる眞實に遇ふと、日野左衞門の門前て聖人は何う在られたか。聖人の眼には日野左衞門は無くて、

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親戀一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。（歎異鈔結文）

故に寒く無いのだとは言はぬが、その寒いに嘸寒からうの御同情が溫いのてある。子供が死ぬ、まるで世界が碎けたやうだ、溫かくは無い。併し夫れが嘸寒から

う〳〵と、他く迄それに眞實で向つて下さる、それが溫いのである。故に人生に風も吹く、雪も降る、併しそれに何處迄もこの御眞實であるとが徹底すれば、宛然猿が綱つけられたやうのものである。我々の心の猿は、あちらの窓、こちらの窓から飛び出さうとする。けれども、綱で引張られるが故に戻つて來る。それが攝取不捨の綱なることである。信仰に這入れば、猿が人に相手にならぬやうになるのだといふも、否、心の猿は人にわるさざるれば忽ち嚙みつきにゆく。昔の人は六根六識猿猴の情と言うて居る。それは我々の目、鼻、耳は皆な窓である、心の猿はその中にありて一つも定つて居らぬ。ウロ〳〵して居る。それに佛はお慈悲の綱を附けて、――此方の方はそんな綱は切つてといふも、佛の方はその者をこそ益々と、攝取不捨の綱は茲て二度と再びあと戻りのつかぬ處に味ひがある。それを攝取不捨は遠うから光明の中に居ることだなどと、それては攝取不捨の意義が立たぬ。一度びお慈悲でウンと遣られ、恐入つた處がなくては可かぬ。或る方は佛のお慈悲は有難い〳〵と、長らくゴム球を頭に投げつけられた程のことに思うて居たが、眞のお惠みに氣がついた時は、まるで金鎚でゴツンと遣られたやうであつたと語られた。其一度ゴツンと遣られた思ひがなくては。それは私の先輩の或る方であるが、『求道』を讀んで下されて『又同じことがある〳〵』と讀んでゆかれる中に段々本願の御眞意といふことが明かになり、何處か分ら無つたが、さながら今迄ゴム球のやうに思つて居た心を、金鎚でゴツンと碎かれた思ひであつたと話された。成る程一念には金鎚でゴツンである。けれども本性なれば、又忽ち心の猿が飛び出さうとする。けれども一度綱つけられた猿であれば、又引張られて戻つて來る。すると頗る不自由な信仰のやうであるも、なに、これ程猿にとつては安全に、氣樂なことは無い。宗教は謔をつき度くもつけぬやうにされて、窮屈とやうに思ふ人もあるも、なに是れ程世間の善し惡しから放たれ、拘泥する處が無くなりて、自由なことは無い。何んだか猿の講話を仕たやうなことになつた。今年は申年である。（以上）

超人生と卽人生

近角常觀

一　超人生

超人世とは信仰の力で人生の五分々々を超絶することである。一家にありても各人が善し惡し、人生の五分々々を言うて居るのでは、信仰なることが意味をなさぬ。信仰の力で、五分々々を超絶さるゝ處で有難いのである。從來の信者でも善きに就け惡しきに就け、何事でも前世の因緣、宿業と諦めることに言うて居る。普通ならば人を咎め愚痴言ふ可き處を、之も前世の因緣、業報と、茲て本統に思ひ切り、離れることが出來るなれば、人放れが出來る譯けである。けれども言葉に言うてる丈けで、心に本統にそれが出來て無い、唯心を押えてそう言ふてる丈けなのは超人世では無い。處が信仰には本統にそれ放れて落ち著ける處があるから、超人世である。

處が從來の信者が離れた如く言うて居て、心に本統に離れられて居無いは、肝腎な處が拔けてある。それは風吹けば寒く、冷い者が人間である。それを何程因緣、約束と言うて見やうが、寒いものは寒い。故にそれ丈けては、矢張り寒いの思ひが離れられぬ。處がそれが離れられるは、『汝、風吹き、寒いであらう、氣の毒だからこの暖爐にあたれ』と、この如何な風雪をも、それを溫める處の火を以て溫めて呉れた時には、離れられる。外界の風を止め、雪を消しに行かなくも、『その風雪で汝が冷い限り溫めやう』と、この溫める火に遇へば、我々人生の風雪から解脫するを得、人放れをすることが出來るて無いかと、いふのである。こは人世を離れて生活することが出來ると言ふ時は、如何にも著しく聞こえ、何うして出來るかといふことになるのであるけれども、今言ふ如く何處迄でも溫めて貰へる慈悲に遇ふもの故、それが出來るのである。

併しこれ程の人生の風雪を、それが氣に懸らぬ迄に溫めて呉れるには、一通りの火ではいかぬ、如何なる風雪にも打ち勝つ丈けの火で無くてはいかぬ。そこが阿彌陀佛の超世無上の本願といふはこのことである。普通の人間の慈悲の火ぐらゐなら超世て無きも、如何なる風雪があつても、それに打ち超えて溫める溫いもの故、超世無上といふ。親鸞聖人は『超世の悲願』だとか、『超發無上殊勝願』だとか、却々この超の字を使つて居られる。或は『正信偈』には、『超發希有大弘誓』とか、『卽横超絶五惡趣』とか。又『大經』には『我超世の願を建つ』とか、又『和讃』には『超世の悲願きゝしより』とか。斯く超の字は當り前以上に飛び超えた味ひである。人間の體溫ぐらゐの慈悲ならば超えたて無きも、ずつと飛び超えた、――『御文』にも『諸佛の悲願に超えすぐれたる』とありて、有らゆる溫かさを飛び超えた、其の上〳〵と如何なる寒さをも溫めて仕まふ處の火とのことが超世である。處が一應溫りても直ぐ寒くなり下つて仕まふは、火の方が一應の溫さ故、五分々々になりて最後まで溫まれぬのである。故に如何なる風雪でも氣にかゝらぬ迄に人生を離れさせて仕まふは、然うさする丈けの超絶した火で無くてはいかぬのである。

處てこは信仰上大切なることにて、この人生を飛び離れた處が無くては、信仰聞いても何にもならぬのである。在來の眞宗の人は、三世の諸佛にも呆れ果てられたる我等を救はんとのお慈悲など、文句では知て居るも、それが何處が溫いのだか、唯文句を知つてる丈けのことになり易い。又青年の人は信仰が何う斯う言うて居ても、何時迄も人生の善し惡しに追隨して居るのでは何の詮も無い。如何なる困難、境遇が來らうと、それと離れて安心の立場を與へらるゝて無ければ、信仰の甲斐が無いのである。それがなか〳〵然うなり難い思ひがするのであるけれども、それが離れられる處が値打ちである。

二　隱れたる思想の法則

そこてこはちと信心頂きの話になりて聞きにくいかと思ふも、之に苦心する人が多い故、これで申して見やうと思ふ。頂き度いて聞く人の最も苦心するは、『御慈悲が有難く成り度い、喜ばしく思ひ度い』之て苦心して居られるが多いのである。最も中には人生の困難

苦惱を解脫せんとして聞かれる人もある。(これて聞くのが信仰は一番分りよい)併しその人でも『それはそれとして、信仰が分れば解ける』の聞き方てあるから、同じてある。處でそれて行きて疑ひ晴れ、有難く思へるやうになるか、それがなれぬて困つて居られるが多いのである。處がそこに斯ういふ思想が一寸ある。『佛が有難くなれなければ信仰にはならぬの故、有難くなれなければ可かぬ』と、之が信仰のことに迄五分々々が出て居るのてある。そして『だから喜べぬのは可かぬ、頂けぬのは可かぬ』と、皆な斯れになつてある。

昨日も或る老婆が『私は何うしてもいけませぬ、疑ひが晴れませぬから、斯れて何れ程坊樣を困らせたか知れませぬ』といふ。至つて眞地目なる尋ねてある。仕舞ひには『私の疑ひなぞは人のと本からが違ふのてすから、いけませぬ』といふ。――これは今の言葉にすると根本的だといふことてある。それは人の如く罪が深いから、惡いから助らぬなどて無くて、『私のは佛樣が有るのか無いのかと疑ふのてすから』と。これは青年諸君の贊成しさうなとこてある。成る程根本的てある。『私は之を思ひますと何んな有難いこと聞いて居ても皆な駄目になつて仕まひまして、こんなて聞いて居ても仕やうが無いと、家に歸つて蒲團被つて臥て見ても矢張り駄目てあります。仕まひには坊樣にも呆れられ、あんな婆は寄せ附けなと言はれて仕まひました』と。思想上に於ても明晰なる不審故、之を明晰に解決して來なければいかぬわけてある。それを申して見やうと思ふ。

すると玆に何人も口にせぬけれども、心の下敗さになつてあると言はんか、常識と言はんか、玆に隱れたる一つの心の法則がある。それは引力で上の物が下に落ちると同じやうに、『此方が斯く疑ふにより、疑ふ者は可かぬと屹度斥けられる』と、これが出て居るのてある。『佛が御座るのかなど、佛の前で大それたこと思ふのは、そんなこと思ふのが可かぬ』と、玆が五分々々になりてある。こは皆樣でも佛が有難ければよきも、有難く無いは可かぬとなりて居られるに違い無い。此方が人を惡しく思へば、思はれた人は可かぬといふに決つて居ると、玆にチャンと五分々々がある。之が超絶仕難いのてある。今の婆さんが行きつ戻りつ何うし

ても超絶し難かつたは茲てある。之は私がよく皆様に『誰が有難くならな可かぬと言ひましたか』『誰がて、皆んなが言うて居ります』『皆んなつて誰ですか』誰も無い。それに然う思へる、あれが一つの思想の法則である。それで六十年來有難く思へぬて可かぬ〳〵と、いかぬ筈である、それては次生迄遣りてもいかぬのである。

三恒河沙の諸佛の、　出世のみもとにありしとき、
大菩提心おこせども、　自力かなはて流轉せり。

これては何生まて遣りてもいかぬは、いかぬ思想の下に成り立つて居るからである。

三　超世の本願の原則

そこて私が婆さんに申したは、『貴方は然ういふが、佛様は何う思うてムると思うて居るか。わたしが有難さうに拜むから、佛さまはだまされてムるか知らぬが、實は腹には佛さまが御座るか知らぬと思うて居るのぢやが。表向きは有難さうに仕てるけれど、心には無いのてありますがと、斯れて聞いて居るのだらう。』すると婆さんは『佛さまは腹も御覧てせうから』と言ふから、そこて私は『それては佛さまは疑ふ者は可かぬと仰しやるか。佛さまは然うては無いのぢや。彼奴殊勝さうに仕て居るが、心の中には疑つて居ることは百も知つて居る。故に可かぬといへば可かぬには決まつて居るが、そのやうに妙なこと思ふ奴故、よけ可哀相に思ふ』と——茲は人のことにすれば分りが早いのてある。監獄で囚人を教誨する時は、囚人は刃向ふのが性分故、刃向ふのが可かぬとなると、教誨の所詮は無い。あゝいふやうに腹立て易い、ひねくれた性分と成り果てたのが哀はれ故、あれは咎むべからず、あれは悪しく思はぬやうにと囚人に向ふが、少くも教誨の意義である。人間に必しもそれが出來るとは言はぬも、少くも悪しきに向ふのは斯うなくてはならぬ。と同じに婆さんが『こんな疑ふのが可かぬ』と言ふに對しても、超世の本願の原則ては、『イヤそう思へるは無理無い、そこは諸佛ても超えられぬ。』——善き者ならよい、修行出來る者ならよいが諸佛てあるも、それては超えられぬから、最後に阿彌陀佛が出現して下されたかと迄思ふことてある。

前橋の星竹藏といふ樵夫は佛を拜みながら、佛は本統に生きて居るのか、燒き火箸あてると血が出ると聞くから、一つやり度いといふやうなことまて思ふと言うた。熱心なる人によくある狀態てある。四國の或人は繪像拜みながら、あの繪像さんを鋏でチョキンとやり度いと思ふと言はれた。又或る僧分の方は若い時非常に喜んて人に感心せられたのが、大きくなつてから喜べ無い。親から、『お前若い時は嘘言うて居つたのか』と言はれ、餘りに苦しくて佛さまの頭に埃拂あてたと言はれた方もあつた。之が皆な斯ういふ心を起すのが可かぬと。こは日常生活ても我々が善く出來ぬから可かぬとなると、可かぬ〳〵て何處迄も起き上りやうが無くなつて仕まふのてある。夫れは皆な悪しければ悪しきは可かぬと斥けられるの原則から來る。故に今の監獄教誨の如く、一つ變つて來る處が無くては『刃向ふが可かぬて無い、刃向ふを哀はれに思ふのてある。それは如何にも境遇上刃向ふ思ひも起らう。』——若し近頃の勞働問題の如くば『然ういふ風に氣の荒びて來たのが氣の毒てある。故にそれて何程逆らはうともそれを此方は悪しくは思はぬ』と、これが現はれて來ねばいかぬのてある。

處て茲て『一應はそうもあらうも、飽く迄此方が遣り通したらば、如何な同情深い人も呆れて仕まはれるだらう』と之がある。するとそれは『此方の悪いのが一應て無い故、如何な慈悲者ても、斯うあつては斥けられる』とこれになる。今朝も婆さんに『昨日は分つたやうだが』といふと『イヤ矢張りいけませぬ、昨晩段々考へて見ましたら』といふたがそれてある。處が佛の慈悲は『そういふ何處迄も疑ひ深い、刃向ひの性分を哀はれに思ふの故に、何程それを思はふと何處々々まてもそれに呆れぬぞ』と、茲飛び超えた心て向はれる超世の本願故、結局の問題は、此方の隔て、刃向ひの力の方が強いか、結局の問題は、此方の隔て、刃向ひの力の方が強いか、それに呆れず斥けず、眞實に仕て下さる力の方が強いか、それて決まることになる。處が一應二應て呆れられる位ならば當り前てあるも、超世の本願は『如何程寒く冷い心て刃向ふも、それを哀はれに思ひこそすれ、悪しくは思はは無い、呆れ無い』と、茲私の思て言へば『私の寒いのを温めてやらう』てはまだ分りにくい。寧ろ『其の寒いのに呆れぬぞ、捨てぬぞ』と、何處々々迄も此の者にいふて下さることが温いといふことなのである。

四　直に來れ

處が茲が却々分り難い。此間も或方に二時間程話して『分りましたか』『筋は分つたけれども、何うも喜べぬので』と言はれる。それでは喜べ無い、冷いのに呆れて下さらぬことを自身の上に聞いたので無い、餘所に聞いて居る。二河白道の譬喩に『直に來れ』とある、『喜べぬて可かぬ、惡しくて可かぬ』ならば直に來れで無い。喜べたら來い、善くなつたら來いである。『直に來れ』は喜べぬ人間に、『その喜べぬを能く見たのだから、お前の方て喜んだり、疑ひとれたりするので無い。その汝の喜べぬを可哀相に思うて、此方は何處迄もそれを能く護るのだから』と、これ故お慈悲に入ることが出來るのである。それを大抵の人が喜べたら、難有くなつたらと取るからお慈悲にはいれぬ。故に若し喜んで信仰に這入つた人があつたら、それはこしらえ物である。寧ろ『鐵は中心迄冷いといふことを諒解したのだから、其の冷いのが辛からう、寒むからう、その冷いのを惡くは思はぬ。その鐵の心迄冷え切つたのを我能く汝を護らう』と、之が難有いとその鐵の者が頂けたのが信仰である。故に直に來れは喜んて、無い、喜べぬ我等に、それに言うて下さるが『直に來れ』である。それを『然ういふお慈悲の佛があるのか』などゝ、そんな遠い所に在るので無い。今現に自分が喜べぬ。然るにその喜べぬに『何處迄も呆れぬぞ、惡しく思はぬぞ』これが直さ〳〵溫めて下さる處の火なのである。聖人は『直に』の言を

諸佛出世の直説を顯はしめんと欲して也。（愚禿鈔）

今日は直觀、直覺といふ言葉がある。火に觸れば『熱い！』之が直觀、直覺である。信仰は佛の聲を聞いてから難有くなる、そんな廻はり遠いので無い。『今汝が寒く、冷いのを、それを察したぞ、見てやるぞ、それを惡しくは思はぬ、何處迄もそれに呆れぬのだぞ』と、それに直さ〳〵言うて下さる御眞實が『直に來れ』である。こゝは餘程問題に切迫した處を申して居るのであるが、御了解を得たてあらうか。

殊に人生問題て我々自分の境遇が情け無いとか、見て呆れ手が無くなつたとか、世の中は強い者勝ちだとか、そうなつた時は人が冷に見えたり、相手に仕て呆れ手が無いやうに見えたりして、結局人間の五分々々て動きがつかなくなつた時が人生の明るみが無くなつた時てある。その時は『然ういふ我に溫くして呆れる人があればよいがなー』迄は誰も考えるのてある。私なども『自分が人に隔て、疑ひ無く向へればよいがなー』とは頻に考えた。そうすると人も自分に然う仕て呆れるから。處がそうなればよいも、ならぬから身動きが出來ぬのである。處が今佛の慈悲は『イヤ我は汝の惡しきを惡しく思はぬ、哀れに思ふ。それは汝の性分ぢや、無理無いと見るから、その爲に毫末も汝を可かぬとはいはぬ、否彌々見捨て難く思ふ』と、之が起つて來ることであるから、茲は際立つた處てある。

五　『惡しくてもよい』では實人生は動かぬ

處が平日聞き慣れて居る人は、茲を思ひ懸けなきことに思うて居らぬ。故に昨日も婆さんは之れ聞いて喫驚した。婆さんが言うたには『ようも〳〵こんな事思うて居て、大地が割れて墮ちぬと思うて居ましたのに』――そう思うて居る處へ『イヤ我はそれをおとさぬ』これ聞くから如何に墮ちる者も浮び上れるのてある。處が婆さんに附いて來た若い人の方は分つて居らぬ。『それは始終聞いてる話てある、珍らしきことて無い』と、更に喫驚せぬ。私は仕まひには言うた。『貴方のは駄目ぢや、餘所に行きて御馳走が出ると思うて居る處へ、そら出たといふやうなものだ』と。これては原則が破れて無い。婆さんの方は斯んな疑ふ者はもう迚も駄目ぢや、救はれぬ、暗みと心て泣いて居る處へ『イヤ我は反對てある。人はそれて遁げて仕まふかなれども、我はそれが哀はれて出て來た佛てある、それを惡く思はぬ、捨てぬ、それて捨てるなら、自分が來た詮が無いて無いか』と、思ひがけなくこれ聞かさるゝ故、聖人は

噫、弘誓の强緣は多生にも値ひ叵く、眞實の淨信は億劫にも獲叵し。適行信を獲ば遠く宿緣を慶べ。（敎行信證總序文）

之れを聞くから如何な疑ひも疑ひの刃が立たず、如何な隔ても、向ふの隔て無き慈悲の爲に融かされて仕まふのてある。處が若い方の人は、『佛は惡しくてもよいと言はるゝに決つて居る』と、この聞き方は道樂者の金貰ひて、『親は愚圖々々言ふものゝ、屹度呆れるに決つて居る』と、これになるから有難く無い。故に然ういふ者には『出て行つて仕まへ』泣く〳〵出て行く處を呼び止めて、『その仕方の無いのが可哀相故見て遣らう』之を言はるゝ時は初めて親の有難さが分かる。處が大抵の人は親をこの甘いことに眺めて、『親が甘いか

らいかぬ〳〵』と、これは『善くなれぬ〳〵』を言はれる人は皆な是である。それでは親が何れ丈け言うて呉れても、言うて呉れるが當り前になる。當り前では超世無上で無い。當り前人が呉れ可きで無い處へ、思ひがけ無く下さるのだから超世無上である。故に斯うなつた日には最早や言葉では分らぬ。實際問題で無くてはいかぬのである。

實際問題では惡しては實際に可かぬから皆な困る。私なども之で行き詰つた。その時は人生と思想とが矛盾して居つた。私は初め何處迄も眞地目でやると思つて居つたのである。處がそれがひどくなつて、『人が自分の眞面目を認めて呉れぬ』『人が不眞地目である』と、人を不足に考へるやうになつたのであつた。然るに本來の理想は『人が惡しくても惡しく思はぬのである』『何處迄も敵を愛して行くのである』そう考へて善く仕て行かうと仕て居るに、人に不足が起つて來たのであるから『これはいかぬ、人が認めて呉れぬと不足が出るのでは、自分が捨てられてるので無い、自分が人に善く思はれ度いで仕て居つたからだ』と。すると然ういふ思ひて仕て居つたを、自分は善くしてるなど、然ういふことを思うて居つたが自分の傲慢であつたと、自分が惡いことになつて仕まつた。すると最早や自分に溫い處などは更に無い。斯ういふ自分の疑ひ隔てが之が可かぬと、之から最早や何うしても出られ無くなつて仕まつたのであつた。其の時に佛の慈悲は『如何程惡しくてもお助けである』と、これ聞いてそこが何うかなれたか。何うもなれぬ。『佛はよいと言うて下されても、斯れでは人が呆れて仕まふ。佛敎ではよいとなるか知らぬが、斯れでは人がいかぬ』と、此時は佛のお慈悲といふことが、『惡しくてもよい』としか聞けて居無かつたのである。處が惡しくては可かぬから煩悶して居る、惡してもよい位なら煩悶しやせぬのである。縱令人はよいと言うて呉れても、自分がいかぬから苦しんで居るのである。處が從來の他力聞く人が大抵茲を『惡しくてもよい』、『返さ無くてもよい』の意味に聞いて居る。それでは平日は或は通れるかも知れぬも、彌々死んで出かける時とか、或は眞の人生に打ちつけた時は、それでは通れぬ。今の婆さんなども、それに聞いて居つたから、『向ふはよいと言つて下されてもこんな疑ひが起るやうでは。』『妄念妄執の心の起るを止めよといふにもあらずて、よいと言うて下さるかも知れぬも、こんな思ひが出るやうでは信仰でなからう』と、これで安心され無つたのである。

六　言うて欲しい一言

すると此の時斯う言うて欲しい。『それは汝も不足を止めやう、隔てを取らうと、一生懸命苦心して居るとはよく分つて居るも、如何せん夫は汝の生來だで取れぬのである。此方はそこを見てやる』と――『返さないでもよい』と『返へせ無い』とは別である。『返さないでもよい』は出來るのでも横著して、仕無いでもよいになるも『汝のはそれ程努力しても出來無いのだから、そこを見てやる』と、この一言が急所である。私が光りを見たは茲であつた。私が何とかして止めやう〳〵と何程骨折つても一つとして止まら無い。一つ止まればあとはいく筈である。何とかして一つこの名譽心さへ捨たればと、何程思うても爪の垢程も捨らなかつた。電車道に人が仆れて動け無い。動けぬと我も危く、人もいふから動かうとしても、動き度くも動けぬのである。そこへ『イヤそこに臥てゝもよい』と。そんなことと言はれたて、誰が電車道で寢て居るものか、如何せん動き度くも病氣で動けぬのである。そこへ一人『ああ、あれは病氣で動けぬのぢや。動かぬと轢いて仕まふぞは、あれは健康者にいふ原則である。未代の智目行足も潰れて仕まつたものはそれでは行けぬ。行けぬ見ると、その行けぬが氣の毒』と――茲私が隔てが止まぬは止まぬが生來と見たからは、今迄止まいでは可かぬとあつた處を手の平反して『イヤ止まぬが氣の毒』と、茲に出て來たのが他力の味ひである。

處が私などは茲迄言はれても猶ほどまついた。それは一念は有難いの思ひと、斯う思ひ込んで居る。それにそれ程迄も言はれても喜べぬのは矢張り可かぬと、根が五分々々で出來て居る人間故、何處迄も之が附いて來る。元來佛を喜ぶことを、佛はお慈悲な人といふことゝ相對的に思うて居るのである。故に『これ迄に言はれても難有いとならぬは、よく〳〵可かぬ』と、之が思へてならぬのである。よく『あれ程懇篤に說いて下されて、この上無からうと思ふのに、それが聞けぬのだから可かぬ』と言はれる人がある。あれが矢張り私なる者に對し五分々々になつて居るのである。それ程に聞いても思へぬのが氣の毒といふでこそあれ、こ

れ程に言ふのだから有難く思へといふ如き慈悲が何處に有らう。それ程に言はれても思へぬのが氣の毒故、そのいつ迄もしぶとく言うて居るのにそれに何處迄も呆れぬのだと言はれるのである。茲になるとも、優しい言葉で言はれて居ては分らぬ。『あれ程に友人が言うて呉れるのに、有難いと一言頭が下つたら友人も甲斐があつたと喜ばふに、これが一言言へぬのだから如何な友人も呆れるだらう』と、最後に之へ出て動けぬのである。最後に友人の方は『君、誰がそれに呆れると言ひましたか。それだから君の心の冷え切つたのが氣の毒と言うて居るのである。その言へぬのが君の性分なのだから、君の方は何うなと其の性分で勝手にやつて居り給へ。此方はその冷いのを何處迄も捨てゝは置かぬのだから』と、茲向うから突き放して貰はねば分らぬのである。

そこで人生これ程のかけ離れた、慈悲の實現といふことが無くば救はれる期は無いのである。この世は斯く何處迄も五濁の凡愚の人生、五分々々の泥ばかしの冷き胸の中に、『直に來れ、我能く汝を護らん』とは、その冷きに何處迄も呆れぬ慈悲の實現である。これ無くばこの世が救はれるといふことは無いのである。

己上は我々の心の冷さで申したのであるが、佛敎が主として生死問題で說くは、現に親が子に別れねばならぬこの仕方の無き人生、その仕方の無きを何處迄も見て下さるゝ、この慈悲の實現ありてこそ、その者が攝取さるゝのである。攝取とはこのお慈悲の爲にこの五分々々の奴が救はれて、人間の方を離れて、お慈悲の方に攝め取られたが攝取である。攝取不捨とはこの隔ての私に、お慈悲の方が斯く何處迄も隔て給はず、その隔てぬ御眞實の爲に終に此方が恐入り、『難有い』とこの淺間しき心の中に、斯の廣大のお心が入り滿ち、屆いて下されたが一念の信である。其の一念に思はず南無阿彌陀佛の一言が出るは、人生斯く互に人間五分々々の網を引き合ひ、互に相手に仕合つて苦んで居る處へ、今斯く廣大の慈悲を聞くもの故、その慈悲の爲に人間五分々々の網を横まに截れ、お慈悲の方に救ひ取られて仕まつたのだから、思はず南無阿彌陀佛の一言が出る。卽ちそれが『卽横超絕五惡趣』である。茲迄皆さまがこれまで、この截られて仕まふ處を頂いて居られたか、何うであらう。

七　機の深信は信仰的自覺なり

斯く茲まで人間の風雪を哀れみて下さる溫き暖爐に遇へば、親鸞聖人が日野左衞門の門前に於けるが如く、如何に冷やされても、日野左衞門に不足が起らぬ。然ういふ若干の業深き親鸞を、その深きが哀はれとの御眞實の溫さよと、――前生の業といふことも、茲て言へるのである。『イヤ俺は正しいのである。俺は正しいのにあんな奴に出遇つたのが業』と、それでは業が人になりて仕まつて可かぬ。茲は眞宗信者の人が、人生問題の上で自分の惡しさに氣がついて來る處の大問題である。

も一つ言へば人間は我慢な者で自分が惡いとは何んなことありても言はぬ。常に言ふが如く罪惡觀といふは、自分が行き詰りて惡いと分るのでは無い。惡いとはこの惠みの爲に安心された處で、初めて分るのである。又同じ話になるけれども、全體人間が他力が見えぬ迄に自分の心で『あゝ斯う』苦む眞面目と、他力が分つて成る程我慢であつたと分ると、同じことのやうで大違ひである。それは例の岩本さんが申譯けが無いと自刄されなければならなかつた考は、道德上、常識上、ばた武士道の上よりも眞面目と言はなければならぬ。處が今その死ぬより、――否死んでも仕やうが無いのを何處迄も氣の毒と見て呉るゝ友人がありて、それを飽く迄も救はうと言うて呉るるとなつた時は、一方は『借りた物なら死んでも自分で返す』といふ我慢の眞面目であるに對して、一方は『さうした處で返へされ無いのを何處迄も引き受けやう』といふ友人の友情である。その間には非常な距離がある。そこをこれ迄の人は『俺が返すからお前は返やさなくてもよい』の言ひ方で、ちつとひどいけれども、『あの友人が返へして呉れるから、自分は仕無くてもよい』の聞き方になつてある。それでは眞面目の人は滿足せぬ。それなら北濱銀行式で、出來ぬ時は何んなことをやりても仕方が無いになる。處が一方は『自分が濟まぬのだから、自分が返さ無くては可かぬ、自分が聞き開き、自分が疑ひ晴れ無くてはいかぬ』――之は甚だ眞面目であるも、それが返し得ぬのである。青年の人は何處迄も『自分が返へせる、善く出來る』の方に目を着ける。けれども それがいつ迄も返へされず、よく出來ぬに行き詰るのである。するとそれを佛の方より、『それは汝、何程思

うてもそれが出來ぬのであるぞ』と――卽ち之が聞えたが機の深信である、罪惡觀である。故に機の深信は自分で出來ぬが分りてて無い。此方は何處迄も出來る〳〵と言うて居るのを、佛の方より『それは汝出來ると思ふのだけれども、それが出來ぬのであるぞ』と、この一言は佛より留めを刺されるのである。『さういふ上は、その仕やうの無いのを何處迄も引受けるぞ、それを可かぬと言ふのでは無いぞ、何處迄もそれに呆れぬのぞ』との仰せなのである。――

この『呆れぬぞ』も言葉て間違い易い。『呆れぬぞ』はお慈悲の深き言である。此方が冷かなれば、『あんな奴』はと遁げて仕まふは慈悲て無いも、『それに呆れぬぞ』が慈悲てある。何處迄も呆れさせられぬ慈悲なれば、終に如何な冷かな此方もその冷かの方が打ち敗かされ、恐入り、とうど其の慈悲に包み取られて、『成る程有難や、自分で出來る自分ては無つた』と、『我身は現に是れ罪惡生死の凡夫云云』の機の深信は、それ程迄に呆れさせられぬお慈悲に救ひ取られた處て出て來る言なのてある。故に『直に來れ』は、此方が『喜んてから』、『疑ひ晴れてから』に非ず、喜べず、善く出來ず――而も此方は何處迄も出來るになる積りて居るのを、『それが出來るのて無いぞ、その出來ぬのを引受くるのぞ』と、この直き〳〵の御眞實てあることを佛より直き〳〵言はれ、その仰せに夜が明けて、『成る程出來るのて無つた、惡るかつた』は、斯くお慈悲に此方の『出來ぬ』が融けて仕まつた處て出て來る自覺てある。斯く『直に來れ』のお言葉の下に、直に夜を明けさせて貰へば、『それが自分て出來るのては無つた。出來ぬ自分を引き受けんとの御慈悲一つが有難い』と、それがの味ひてある。

獲信見敬大慶喜、卽横超絶五惡趣。（正信偈）

八　卽人生

さて妙な處に卽の字が來た。卽ち卽人生の味ひてある。それは我々が五惡趣を超絶するは、死にしまにて無い。如何なる人生の寒さも、それに打ち勝ち溫める慈悲の火に遇へば、その風雪の人生に居て安心させて貰へる、人生を離れて安心するのて無い。その如くこのお慈悲の火に溫まれば、この寒き人生に居て、直に溫かく生活させて貰へる、それが卽人生の味ひてある。故に一度び人生を超絶した超人生の味ひが無ければ、卽人生の味ひは來ぬ。

此の間も五六年前より私が九州に行く毎に聞きに來られた或人――その人は種々の困難を潜りて、喜びに入られた人であつたが、昨年末に死なれた。日記が遺つてあつて、喜びが書いてある。主人がそれを見られて大吃驚せられ、私に聞き度いとのことであつた。私はハッキリした記憶が無つたので、寫眞を持つて來て貰つて、見るとよく分つた。日記を見ると實に著しき安心てある。處がその人が死ぬ前の言が、『あゝ死にたく無い、』――それは漸く幸福の時機に入つて、死なねばならぬのてあるから。また『わたしが死ぬと、殘つた皆んなが氣の毒ですな』と。――これは『死に度く無い』は本統の言てある。今迄苦心して仕上けた丈け、よけ死に度く無い。然るに死なねばならぬを佛かねて知召し、その仕方の無きを何處迄もお見捨て無き慈悲に救はれて、その者が參らせて貰ふのてある。それ丈けの安心があればこそ、自分の往く先きに不安に思ふことは無けれども、さて自分が居無いとなると、『あとの人が皆な不幸ですな。』と、この一言は如何にも自信のある、――親も夫も兄弟も、殘らずを一身に引受けた自信ある一言と思ふのてある。又實際それが出來得るのてある。然るに然うありながら、その自分が死んて往かねばならぬ人生なれば、その自分が何處迄もお見捨て無き超人生の惠みによりて安心し、その惠みの故に、其の者が安心して卽人生の生活がさせて貰へるとなるのてある。

猶ほ卽人生のことをも、一つ言ひ換へると、聖人は卽往生、便往生とのことを言うて居られる。『愚禿鈔』には

又二種の往生有り。一には卽往生。二には便往生。（上略）卽往生とは斯れ則ち難思議往生、眞の報土也。便往生とは卽ち是れ諸機各別の業因、果成の土也。胎宮邊地懈慢界雙樹林下往生なり。亦難思往生也と知る應し。

卽も便も『すなはち』と讀む。うち便往生は眞實の惠みが頂けたて無い、卽ち方便化土の往生が便往生てある。卽往生はこの世にありながら、眞實の惠みに夜があけて、一念に超絶する。卽ちこの世に卽しつゝ、直に超人生の生活を得させて、貰ふ處の味ひてある。

（已　上）

思想問題解決の焦點

（免囚保護事業職員養成所に於て）

近角常觀

思想問題と申しまするものは廣いのであります。殊に近頃世間の雜誌若くは刊行物等に現はれて居りまする所の思想問題は、極端に申しまするならば、西洋にありまする所のものを直ちに飜譯を致して、さうして競ふて宣傳するといふ樣な具合でありまするから、何にを以て思想問題の樞軸と申しませうか、扇子に譬へましたならば其要で全體を保つて居るやうな具合に、思想問題に就てどの點を要と狙つて善いか、其狙を付けることすらも殆ど困難のやうな具合に、亂雜になつて居るかと思ふのであります。ところで私は、平日此思想問題を取扱ひまするときに、いつも思想問題の傾向を二つ見出して居るのであります。是は此度斯の如く思想問題が喧しくなつて初めて申すのではありませぬ、平日からさう考へて居るのであります。それだから適當に名前を附けることは出來ませぬけれども、先づ假りに一方を律法主義と云ひ、他の方を自由主義とでも名付けませうか、斯ういふ二つの思想の脈が、全體人間にあると私は考へて居ります。律法主義といふ言葉も、或は十分に言ひ表はされて居らぬかも知れませぬが、兎に角道德的にせよ、又刑法等の問題にすれば文字の示すが如く法律方面にせよ、尙ほ進んで言ふたならば政治的のやり方にせよ、萬事一つの極りを拵へて、其極りのやうにせねばならぬといふやうに、人の心を察し、人の行を察し、人の思想を察して、さうしてやつて行かうといふやうな政治のやり方を名附けて、私は律法主義と考へるのであります。たとへば官僚的に斯うせよと命ずるばかりでなく、人々相集まり社會的政治的に爲ることも、一の型を以て人を規定しようとするが律法であります。殊に軍國主義的に、是非斯くあらねばならぬといふことは、大なる律法でありませうが、併ながら其事ばかりが律法ではない、私自身が一つの理想を考へまして、斯ういふやうな具合に自分の行ひをせねばならぬといふ風に、私が自分を強いて斯ういふやうに爲やうと、頻りに試みますることも、矢張り律法であります。是は宗教の上から申しましたならば、さういふやうにして行かうといふ風の思想を律法と名付けるのであります。さうしますると私共の心が律法的に行けば宜うございます。又人に對して斯うせよあゝせよといふやうな具合に强制し、道德的に言付けても、其通りに人が出來れば宜うございますけれども、丁度私共の心にはそれの正反對の一つの考へがありまして、其理想若くは律法のやうにせずして、自分の心の欲するが如く斯うもしたい、アゝもしたいといふやうな具合に、惡くいふならば、卽ち放縱になり、良き言葉で言つたならば自己の欲する樣に、自分の自由の方面に自分がやつて行きたいと考へる思想があります。是も言葉が甚だ宜しくないかも知れませぬけれども、廣い意味に於ての自由の主義と、斯う言つて見たいのであります。此二つは廣く申しまするならば、今日の思想上の問題に現はれ、且つ又現今は歐羅巴の大亂を首めと致しまして、是に引續いて社會狀態の上に、皆な是等の思想が色々な形を以て現はれて居る、といふことを私は信ずるのであります。併ながら先づ之を解決致しまするに就て、さういふやうな客觀的に、外界的に廣い觀察をしますよりも、先づ之を自分の方寸の裡に納めて、私共自分が自から斯うしなければならぬといふ所の律法の思想と、其律法の思想に反抗をして、自分が斯ういふ風にしたいと思ふ所の自由的の思想といふものとが、我々の內面に於てどういふ具合になつて、どういふ具合に其の解決を得るかといふことを私共の心の上から考へて行く方が宜いと思ふのであります。それを私自身の經驗を入れて御話を申して見たいと思ふのであります。

私は全體自分の思想問題の過去を顧みまするに、自分の敎育若くは境遇、殊に宗敎といふやうな關係の上から、常に私の考へになつて居りました理想は、卽ち律法は、どういふことであるかといふと、自分をば犧牲にして、自分の身を捧げて、さうして人の爲めに盡して毫も恨む所なく、何處までも甘んじてそれを成し遂げるといふことを以て、一つの理想と考へて居つたの

てあります。是は敢て私ばかりが申すことてはない、既に皆さん方の御經驗のある所てありまして、苟も宗教若くは社會救濟といふやうなことに御關係の方は、皆な其理想を持つて御進みになるとゝ思ふのてあります。所が、私が自己の理想を持つて進んて居りました最後に於て、遂に其理想が碎けて、さうして自分の今申しまする所の律法が破れて來たといふ所の、一つの經驗があるのてあります。それはどういふ所て破れたかといふと、敢て私が自分の利益を好む譯てもなく、敢て自分のしたことを誇る譯てはありませぬけれども、斯の如く自分が全身を捧げて犧牲となり、献身的に働き殊に我は正義を行へりと思つて居るにも拘らず、他人の爲す所を見、又他人の仕事に對する所の態度を考へて、一種の不滿足を感ずるやうになりました。其不滿足に感ずる所の一番の基本は何れにあるかといふと、自分は是丈けに身を捧げ、自分は是程に犧牲になつて居るに拘らず、他の者はどうも自分のやうにしない、又自分の精神を理解しない、人は皆利己的に働いて居るやうてあるのみならず、自分は假令犧牲にならうが献身的に終らうが、闇から闇に葬られやうとも不足とも思はないけれども、自分の信ずる所の正義なるものが、遂に滅びて仕舞つて、さうして他の人の扱つて居る事柄が、世の中に通つて行くといふことてあるならば、甚だ世の中といふものは不理窟なるものてあるといふやうな、根本的の懐疑思想を私の心に起して來るやうになつて來て、それから、忽ち私の胸の中に、どうも是は甚だ不滿足なことてあるといふ思ひを以て、他の方を否定をするやうな考が、非常に激しくなりました。此時に於て私の年來の理想として居る所、律法として居る所は、如何に自分の思想と一致しないものに對しても、こちらの方は不足は言ふまい、自分といふ者を如何に犧牲にした所が、更に遺憾とは思はない殊に敵の爲めに自分の身を捧げて居ることは、最も望む所てあるといふて居る自分が、最後に至つて斯の如く、自分といふものを滅して仕舞ふといふことに就て甚だ不滿足を感ずる、是れは誠に思掛けない、誠に矛盾てあると氣が付きて見れば、今までの自分の理想といふもの、つまり言ひ換へますれば私が矢張り自分の正しいことを人に認められたい、自分はこれ丈犧牲になり、献身になつたことを矢張り人に認められたいと

いふ所の考が、根本に横はつて居るものてあるといふことを自から悟るに及んて、前の律法思想なるものが碎けて、是ては自分が犧牲になつて居るのてはない、自分は献身と言つて居るけれども、献身になつて居らぬのてはないか、我を捨てゝ居るといふけれども、自分は斯うして居るぞといふ我があるのてはないか、前に敵を愛するのてある、身を捨てるのてある、献身的にするのてあるといふ思想は、悉く碎かれて仕舞ふたのてはないか、と斯ういふことが私の心に分つて來たのてあります。卽ち先程から申しまする律法主義の破綻てあります。此處は餘程氣を附けて戴きませぬと、分り惡い所てあります。

此處て一寸餘所事に渉るやうてありますけれども、人間といふものは人の事にすると分り易いのてありますから、近頃の歐羅巴の動亂、及び是に關する所の昨今の狀態を一つの例として、此所に持つて來るならば、全體歐羅巴の思想といふものに於て、矢張今申しまする所が、どうも離れないと思ふのてあります。御承知の近來永く引續いた大動亂の原因を考へて見れば、獨逸が歐羅巴に於て覇を唱へやうとして、斯の如く軍國主義を以て外に臨んだといふことが原因てありまして、それに對して今日は誰も宜いといふことを思ふものはありますまいけれども、若し之を獨逸自身の立場から言つたならば、矢張り獨逸の文化といふものは、世界を富强にする丈けの力があるものてあつて、又單に獨逸自身の國ばかりのことを考へて居るのてはない、宗教改革をやつたルーテルが教典を獨逸語に飜譯して以來、獨逸の思想が結付いて、我は正義なりといふ觀念を以て、斯の如く獨逸に油を注いて戰つたものてあるといふことは、多小獨逸の事情を知つて居る者は、認めても宜からうと思ひます。其事が正しくはないけれども、獨逸としてはさういふ風に思つたのてあります。此所に於て亞米利加、英吉利等は忽ち獨逸の軍國主義に對して大に反抗の聲を揚げて、我々は獨逸の國民を敵とするのてはない、獨逸の官僚を敵とするのてある、獨逸の軍國主義を敵とするのてある、今後は民本主義ならざる可からず、デモクラチックならざる可らずといふ聲を揚げて、此思想上の大戰爭が此所に起つたと見なければならぬのてあります。今更獨逸の軍國主義に對して、屍に鞭撻つが如きことを言ふには及

びますまいけれども、是に反抗して起つた所の英吉利亞米利加のデモクラシーなるものが、果して絶對的の眞理であるかどうかといふことは、此所に於て一考を費さねばならぬと思ふ。何となれば是は互に相爭ふて居つて、さうして向ふに對してこちらの方は正義なりと言つて戰つて行くことに於て、事實が現れて居る。歐羅巴に於ける英吉利、佛蘭西の如きは、國際的に於きましても、既に劇しく互に戰つて行く所の思想を露骨に現はして居りますけれども、亞米利加に至つては殊更正義をかざし、人道を唱道したウィルソンが、斯の如き國際聯盟を提唱されたものであるから、動もすれば亞米利加が斯の如く言ふならば、其亞米利加の言ふことが絶對的であるかの如く、國際聯盟の當初に於ては日本人も然か思ふ者があつたのでありますが、是も互に自分が正しいものであるといふことを以て、他に戰つて行くに於て、矢張り一つの五分五分の戰であるといふことを認めなければならぬのであります。ちよつと言葉が充分でないので御諒解がむづかしいかも知れませぬが、自分を犧牲にして、正しいことの爲めに飽まで盡して行かうなどゝ思つて居つた私が、最後に於て我が正しいといふ考が廢らぬが爲めに、却つて自分が犧牲になると言つて居りながら、犧牲になり得ないのです。人間としてはさうなるのが當り前である、人間がさう絶對なることが出來る筈はないのであるから。我こそは正義なりと言つて居ることが、既に間違つて居る。甲なる者が正義なりと言ひますが、乙から言へば甲が歪んで居る、人間といふものは自己を本にして人を眺めて行くのでありますから、我こそ正しと言ふて居る事柄が、人の立場から言ふならば、こちらが歪んで居るのであります。さうすると律法的に我は正義である、我は正しいと言つて居るけれども、其根本を見ると、自己が正しいといふ立場が離れないといふことになつて、最後には遂に我が犧牲になるといふて居つたのも、献身的にやると言つて居つたのも、我は犧牲になり、献身的にして居るといふ其我を押立てることに努めて居ると、自然自己を主張する事になるのである。亞米利加がどれ丈け正義を言ふても、亞米利加は自己を主張するのである。是は殊に宗教に於て考ふべきことであつて、我々が自分の信することが正しいから、自分の言ふことが良いからといふことを言ふのは、宗教をかざして自己を主張するといふことになり易いのであります。其處に氣が付いて來ると、各人各個自己の言つて居ることが根本的になつて仕舞つて、前に言ふた犧牲、献身といふやうなことが皆碎けて仕舞ふことになつて來るのであります。

段々話が進んで參りますけれども、全體私の思ふ通りをば遠慮なく申しますると、歐羅巴に於て是程の動亂が起り、又從つて是丈けの思想上の大混亂が起つて居る。我國が幼稚なと申しませうか單純なと申しませうか、其の思想から遙に之を望みますると、實に思想問題として盛なりといふやうな、感じを起しますけれども、併ながら、其歐羅巴の思想なるものゝ大體を捉へ來つて、其根源は何處に在るか。斯ういふことを研究をして見ると、要するに國際的に我は正しいて、覇を唱する所の軍國主義が破れ、官僚主義が破れ、民本主義といふことになつて來て、それが財政問題、勞働問題社會問題といふ風に問題が變つて來て、貧富の差上下の段階、其段階の形式こそ變つて居るけれども、いつまでも我は正義なり、我の言ふことは正しいものなりと言つて、戰つて行く所の大勢が歐羅巴の社會、世界を支配して居るものであるといふことを、斷言して決して暴言ではないと思ふのであります。是は私は今日に於て言ふのでありませぬ。二十年前獨逸の形勢などを見まして、其時分に獨逸の社會黨が盛んに獨逸帝國に對して、色々のことを致して居ります。獨逸の國内に於ける社會問題の盛んな樣子を見ました時にも、私は同樣に感じた。どうも歐羅巴といふものは、總ての問題が自己を正なりとして、他を不正なりとして居る。自分の思ふ所をもう一つ進めますれば、全體私共が平日念として居る、日本に於ける國家と宗教との關係といふやうな問題でありますが、西洋に於てさういふやうな問題が如何に立行くかといふことを氣を付けて居りますのに、國家と宗教といふ關係に於てすら、或時代に於ては教會なるものが國家の上に立つて、さうして所謂之を專門的の言葉で申せば、キルヘンスタートといふやうな具合に、教會が上に立つて、國家といふものを支配をして居つた。極端に言ふならば制御して居つたといふ時代が起りますと、此度は逆にスタートキルヘンといふやうな、國家といふものが教會を自分の下にして、自由自在にしたといふことになつて、(現に

獨逸の如きも其一つてありますが)、さういふやうに、國家と宗教の關係に於ても、始終戰つて居るといふことになつて居るのであります。それが敢て國家と宗教の問題ばかりでない。互に國際上の問題のことは、勿論のこと、財政上の問題、經濟上の問題、勞働問題、社會問題、皆それが其通り行つて居る。それであるから歐羅巴のやうに種々の思想があるけれども、其樞軸と言はるべきものを掴んで見たならば、我は正義なりと言つて、自分といふものが何處までも打碎けるまでは、戰ふといふことが卽ち思想の根本になつて居ります。是は私の言ふことに於て、若し違つて居る點があれば、どうぞ御遠慮なく御指導を仰ぐといふことに致します。私はさういふ具合になつて居ると思ふのであります。

所が今日此思想問題の解決の要點と申すのは、それは自分が正しいものだと言つて、いつまでも押して行くといふならば解決は着かない。今日の色々の社會問題ストライキ問題の如き、唯押して行く丈けでは解決が着かぬ。そこで我は正しいと言つて、飽くまで人と戰つて、いつまでもさうやつて居るのでは、永久の平和が來らぬてはないか、して見ると第一に我は正しいといふこと夫れ自身が卽ち一種の自我主義で、自分を以て他を律せむと思ふ考へに依つて居る。これは間違てはないかと反省して見なければならぬ、其點に於て力を入れなければならぬ。どうしても反省することが思想問題を解決するといふ一つの點であると思ふ。近頃思想問題を申して居る人、殊に近頃の勞働問題、社會問題を論ずる人が、全く唯一の客觀に立つて、世界の現狀は唯一の歷史であると云ひ、又世界のことは皆物質から現れて居るといふ見解の上に立つて居るのでありますから、今申しますやうな、主觀的な自己的の見やうはしないことになつて居りますけれども、御同樣精神の感化といふ仕事、或は皆さんの御從事になつて居る所の保護事業にしましても、內面の問題といふ上から氣を附けて見なければならぬことは、自分が正しいと言つて飽くまでも進んで、他を否定するといふ其ことが根本に爭ひの基であるから、世の中に爭ひなからしめむとするには、先づ我は正しいと言ひ張る心の存するを如何にしやう。外のものより、我こそ正しいと思つて居る自己の心を如何にしたならば和らいで戰ひ

勿らしむることが出來るか、といふことを考へる必要があると思ふのであります。

そこで話が大分混雜致しますが、皆さんの御關係になつて居る所の事業に、御參考になるやうにと思つて言葉を費したのであります。私が初めの如く自ら犧牲になり、献身的になつて居ると思つて居る者が、遂に最後に至りまするとと、其犧牲、献身の考が碎けて仕舞つて、我こそは〳〵といふ考て自己を主張する。謂はゞ自由の思想の方に立入つて仕舞つて、元の道德的に律法的に理想的に考へて居つた思想が碎けて仕舞つて、俗な言葉で言ふと、居直つて仕舞つたやうになるのであります。是は思想問題を輕々に考へる者が、非常に注意をしなければならぬと思ふ。日本などに於て現今の思想問題の經過を考へるのにさうである。學校に於て或は道德或は修養或は犧牲になれなどゝいふ、道德的な教訓的な立派なことは澤山に言つて居る。極端に申しまするならば、或程度までそれを行つて國家の爲にも大に盡した、身を犧牲にした結果がどうなつた。遂に自ら得る所なくして、世の力ある者が利益を得て仕舞つた。是に於て自分の力を犧牲にした者は、いつまでも犧牲になつて居つても、いつまでも献身的にやつて居つても、自ら生活することが出來ずして、さうして其結果たるや他の力ある所の者が收めることになるならば、詰らないといふことになつて仕舞ふ。玆に思想の一大變化を來すことになるのであります。是は遠慮ない批評でありますけれども、餘程注意しなければならぬことゝ思ふ。斯の如き場合に於てどれ丈け犧牲になれ、献身的にやれと言つて見た所が、根本に於てさういふ思想が碎けてしまふた者に對しては、遂に救ふに由なしと思ふのであります。其點になりますと近頃隨分思想問題の解決に就て、上下共に非常に注意をして、色々な方法を以て涵養することを努めて居らるゝけれども、斯ういふやうな思想界であるから、其思想界に向つて從來の如く犧牲的になれ、献身的になれ、と言つて見た所が、極端に言へば何等の感化も與へざるのみならず、從來の道德全體に對しても、愈々疑を持つやうになつて居るかと思ふのであります。

然らば私の言ふのは、自由主義で行けと云ふのであるかといふとさうではない。今律法主義のいかぬといふことは申しましたが、近頃世間の新しい主義、舊道

德を破るやうな思想、是は隨分歡迎されて居るやうであるけれども、さういふ自由なるもの、惡くいふならば放縱三昧に陷つて仕舞ふてはならぬ。其結果は無秩序になつて仕舞つて、何等救ふに由ないことになつて仕舞ふと思ふのであります。大膽な批評をするやうですが、先づ今日歐羅巴に於て社會問題の上から、遂に過激思想まで及んで居るのは、唯自由の方を言つた極端が其如くになつて仕舞つたと、斯う思ふのであります。さうすると此度は第二の焦點といふべきものに逢着致したのであります。我々が今云つた樣な具合に、自分の自由である、自分の思ふ通りである。其通りやつて行けば宜いので、それを恣にして我々自ら安じて居らるゝものであるかどうかといふが問題である。私の前に申した如く、自分が正しい正しいと言つて自分を主張して行くといふことが、是が宜しくないとは分つたけれども、又第二番目の如く、そんなら自分の思想通り唯自由にやつて行けば、それで正義だと云ひ、それで滿足が出來るかといふとさうではない。言葉を換へれば私が身を犧牲にし、献身的に働き、飽まで正しいことをしたいと思つて出立したものが、それが碎けて自由放縱に流れたからと言つて、それで滿足する譯にはいかない。さうするとどういふ具合に第二番目の自由放縱の思想をば解決することが出來やうか、斯ういふことであります。

然らば是はどうして解決が出來るか、我々が我慢を張り、爭ひをし無限に要求し人を羨み、樣々の心を持つて居る私共が、如何なる方法に依つて其心を滑らかにするか、其解決の方法があるかといふことであります。兎角內面の問題を論じまするときに、外界の問題と互に引つ着いて仕舞ふ。私は眞面目になりたいけれども、人が我慢を張つて爭つて來る、私は獨立したいけれども外から誘惑をする、それだから出來ませぬと兎角卵を外界に歸するけれども外界にどんな誘惑があらうとも、妨害しやうとも、そんなことに我々の心が動かぬやうになつて居れば宜いではないか、左うならなければならぬのであります。それはどうして出來るか。私は自身の經驗から申すと、是は自分が今日まで人に目を着けて居つたけれども是は誤りだ、自分が爭ふのが本だ、自分が人を疑ふのが本だ、自分が要求するのが本だ、だから之を解決すれば宜いのだ、是まで焦點を極めて行きます。ところが扨て其心を私がどう解決が出來るかといふ段になると、どうも其處まで分つて居つても出來ない。是程に自分といふものが自分の心といふものを惡ひといふことを自覺して、此隔てをなくせば宜いといふことは分つて居るけれども、此隔たりを解くことが出來ぬ。そこで私は、最後に迚も自分では夫れを解く力は無いが、若しや人生に此私の爭ひ深い、我慢の多い私に向つて、此爭ひ深い、我慢の多い人間だといふことを理解をして、其理解をしたる結果、其爭ふときに爭はず、こちらの我慢に對して向ふが我慢を離れ、私の爭ひも我慢も無限に融和するやうな具合に、私に對してして吳れる所の同情ある友達なり、同情ある所の溫きものに出會つたならば、外界はどうなうとも、其溫きものに依つて私は生きることが出來る。どのやうな風が吹いても雪が降つてもストーブといふものが出來て、私の身體を暖めて吳れるといふことがあつたならば、如何に我慢な私もその同情には、初めて悅服して、滿足することが出來やう。假令雪や風は元のまゝであつても、然ういふ溫き者さへあれば私は溫かに雪風のないと同然である。其同情の餘余なるもの、眞に我を理解して吳れるものを欲しい。となりて、それが佛であつたことに氣づいたのが私の信仰問題であります。(終)

第十回夏季求道會

七月廿五日より八月一日迄

時　日　毎朝八時より　講　話

毎夕七時より　信仰談話會

場　所　本郷區森川町一番地　求道會館

講題　一　親鸞聖人『教行信證』眞佛土卷

二　信仰と思想及社會問題

本年は地方傳道を見合せ、專ら夏季求道會に集中致度、特に地方御來會諸氏の御便宜の爲期日を上記の如く取極め開催致度候間求道の諸氏は此際奮て御出京御來會被下度候

（來聽隨意）

求道會館

電話小石川一六四一番

近角常觀著

懺悔錄

十一版

定價卅錢郵稅貳錢

本書には著者が人生の暗黑にぶつつかつて苦しみました事から、それが大悲の眞實に救はれ、方向一轉の信仰生活に出させられた實驗から、それが王舍城悲劇、阿闍世王の煩悶得脫にあらはれたる佛陀大悲の眞面目であることから、それらが簡明を主として、殘らず本書に盡くしてあります。著者が告白書として、著者の信仰を理解さるゝには最も好適であります。

●集金郵便●

本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り何書にても御便利集金郵便の御註文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料金を加えたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區森川町一
振替口座東京一六六九六番　求道發行所

求道前號要目（八年十一月發行）

絕對の善惡——眞善知識と絕對聞信
一實の大道……近角常觀
選擇本願の行信——『正信偈講話』……近角常觀
辻富路子孃追悼法話
信仰書簡二章
▼御正忌▼御往生

●本誌は毎月一回十五日發行とす●誌代は總て前金御拂込みのこと●送金は成るべく振替によられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割增●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部廿五錢（六ケ月分壹圓卅五錢　一ケ月分貳圓五拾錢）（郵税不要）

大正九年五月十二日印刷
大正九年五月十五日發行

發行人　近角常觀
編輯人　近角常音
印刷人　佐藤駒次郎
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
電話（小石川一六四一番）振替（東京一六六九六番）

（大正八年十一月十二日第三種郵便物認可
大正九年五月十五日發行（毎月一回十五日發行））